

一般国道7号
小川交差点改良事業関係発掘調査報告書

狐屋敷遺跡

2013

新潟県教育委員会
財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

一般国道 7 号

小川交差点改良事業関係発掘調査報告書

きつね や しき
狐 屋 敷 遺 跡

2 0 1 3

新潟県教育委員会

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

序

一般国道7号は新潟市中央区から青森県青森市に至る主要幹線道路です。また、村上市民の生活を支える道路として重要な役割を果たしています。現在の国道7号小川交差点付近は片側1車線の緩いカーブ区間で、追突事故や右折事故が発生しています。このため右折レーンの設置および上り線側の歩道整備を行い、死傷事故の削減及び歩行者の安全を確保するため、改良事業が計画されました。

本書は、一般国道7号小川交差点改良事業に伴って実施した、「狐屋敷遺跡」の発掘調査報告書です。

中世の集落の一部を調査し、自然流路や柱根・井戸・土坑・ピット等を検出しました。調査範囲が狭く集落の全体の様子は不明ですが、検出した2基の井戸は下越地方に多くみられる礫組のものです。

遺物は、珠洲焼・越前焼・瀬戸美濃焼・青磁・白磁等の土器・陶磁器類、石臼・砥石等が少量出土しました。

発掘調査で得られたこれらの資料や本報告書が、埋蔵文化財に対する理解や認識を深める契機となり、地域の歴史資料として広く活用されることを期待しています。

最後に、この発掘調査に対し、多大な御協力と御理解をいただきました村上市教育委員会、並びに地元の方々、また、発掘調査から本書の作成まで格別な御配慮をいただきました国土交通省北陸地方整備局羽越河川国道事務所に対し厚くお礼を申し上げます。

平成25年3月

新潟県教育委員会

教育長 高井盛雄

例　　言

- 1 本書は、新潟県村上市小川字孤屋敷1010-1ほかに所在する孤屋敷遺跡の発掘調査記録である。
- 2 調査は一般国道7号小川交差点改良事業に伴い、国土交通省北陸地方整備局羽越河川国道事務所から新潟県教育委員会（以下、県教委）が受託したもので、調査主体である県教委は財團法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（以下、理文事業団）に依頼した。
- 3 埋文事業団は、掘削作業等を藤村ヒューム管株式会社に委託して発掘調査を実施した。
- 4 遺物の注記は、調査年度2012年の12と孤屋敷遺跡の略記号「キツヤ」にグリッドNo.・遺構名・層位等を併記した。
- 5 本書の図中で示す方位は、すべて真北である。ただし、ここでいう「真北」は日本平面国家座標（新座標）のX軸方向を示す。
- 6 掲載遺物の番号は、種別に関係なく通し番号を付した。本文および観察表、図面図版、写真図版の遺物番号はすべて一致している。
- 7 本文中の注は脚注とし、頁ごとに番号を付した。また、引用文献は、著者および発行年(西暦)を文中に〔 〕で示し、卷末に一括して掲載した。
- 8 遺構図のトレースおよび各種図版作成・編集に関しては、有限会社不二出版に委託してデジタルトレースとDTPソフトによる編集を実施し、完成データを印刷業者へ渡し印刷した。
- 9 本書の執筆・編集は、佐藤友子（理文事業団専門調査員）が行った。
- 10 近世陶磁器の時期については、相羽重徳氏にご教示いただいた。文章化にあたっての誤りの責は佐藤にある。
- 11 調査成果の一部は、孤屋敷遺跡現地説明会（2012年6月2日）、広報紙「埋文にいがたNo.79」等で公表しているが、本報告書の記述をもって正式な報告とする。
- 12 出土遺物および調査・整理等に係る各種資料・データ類は、一括して県教委が新潟県埋蔵文化財センターで保管・管理している。
- 13 発掘調査から本書の作成に至るまで、下記の方々および機関、地元の方々から多くの御教示・御協力をいただきた。ここに記して厚くお礼申し上げる。（敬称略　五十音順）

相羽重徳　小川町内会　前嶋　敏　三面川沿岸土地改良区　村上市教育委員会

目 次

第Ⅰ章 序 説	1
1 調査に至る経緯	1
2 調査の経過	2
A 試掘・確認調査	2
B 本発掘調査	3
3 調査体制	4
A 試掘・確認調査	4
B 本発掘調査	5
4 整理作業	5
第Ⅱ章 遺跡の位置と環境	6
1 地理的環境	6
2 歴史的環境	8
A 中世の歴史的環境	8
B 中世の遺跡	10
第Ⅲ章 調査の概要	12
1 グリッドの設定	12
2 基本層序	12
第Ⅳ章 遺構	14
1 概要	14
2 遺構各説	14
A 井戸	14
B 土坑	15
C ピット	16
D 自然流路	17
第Ⅴ章 遺物	18
1 概要	18
2 各説	18
A 陶磁器	18
B 石製品	19
C 木製品	19

第VI章 まとめ	21
1 磁器井戸について	21
2 陶磁器から見た遺跡の消長	23
《要 約》	25
《引用文献》	26
《遺物観察表》	28

挿図目次

第1図 遺跡の位置	1	第4図 周辺的主要遺跡(中世)	9
第2図 試掘・確認調査トレンチ位置図	2	第5図 グリッド設定・基本層序図	13
第3図 周辺の地形	7	第6図 慶長2年「瀬波郡絵図」白描	24

挿表目次

第1表 周辺的主要遺跡(中世)	8	第4表 陶磁器から見た遺跡の消長	23
第2表 土器・陶磁器集計表	18	第5表 小河氏・小河村閏連年表	24
第3表 越後の磁器井戸一覧	22		

図版目次

【図面図版】

- 図版1 造構全体図
- 図版2 造構分割図(1)
- 図版3 造構分割図(2)
- 図版4 造構分割図(3)
- 図版5 造構個別図(1)
- 図版6 造構個別図(2)
- 図版7 造構個別図(3)
- 図版8 陶磁器・石製品(1)
- 図版9 石製品(2)・木製品

【写真図版】

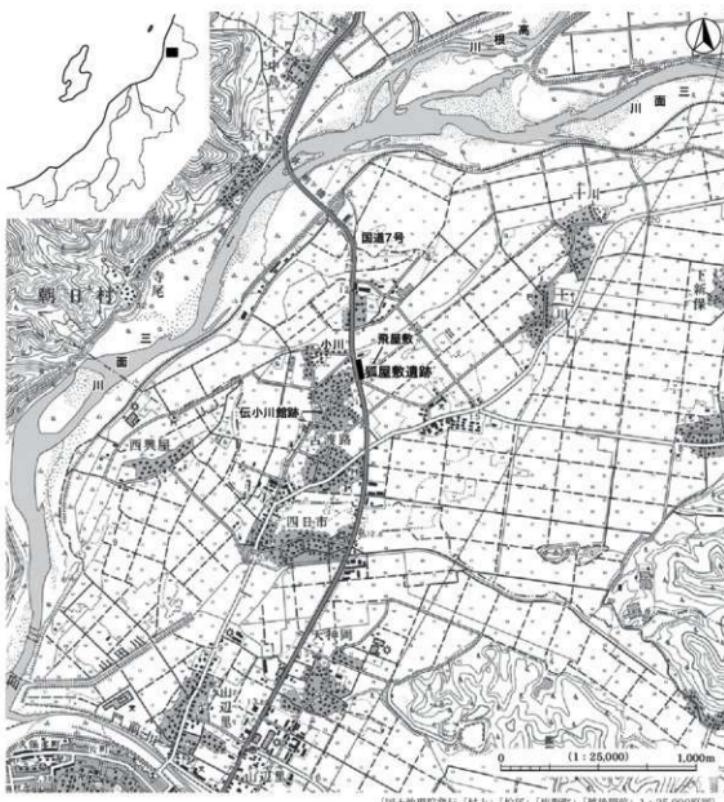
- 図版10 完掘
- 図版11 南側完掘、SE9・19・22・34
- 図版12 基本層序①～⑥、SE9
- 図版13 SE9・19・22
- 図版14 SE34、SK2・8・18・20
- 図版15 SK21・29～31
- 図版16 SK32、P3～6・10
- 図版17 P11・15・16・25・33
- 図版18 P33、SR1・28
- 図版19 陶磁器・石製品
- 図版20 木製品

第Ⅰ章 序 説

1 調査に至る経緯（第1図）

一般国道7号は、新潟市中央区から日本海沿いに山形県庄内地方、秋田県を経由し青森市に至る総延長471.3kmの主要幹線道路である。

一般国道7号小川交差点改良事業か所は、スピードの出やすい新潟県村上市郊外の平地部で、片側1車線の緩いカーブ区間になっている。右折レーンが設置されていない交差点において、追突事故や右折事



第1図 遺跡の位置

故が発生し、重大事故も発生している。また、上り線側の歩道が未設置であり、地元住民からの設置要望がある。このため、交差点部の右折レーン設置や上り線側の歩道整備により、死傷事故の削減及び歩行者の安全性を確保するため計画され、2007年度（平成19年度）に事業化した。2009年度（平成21年度）から用地買収を開始し、2010年度（平成22年度）には工事着手した。

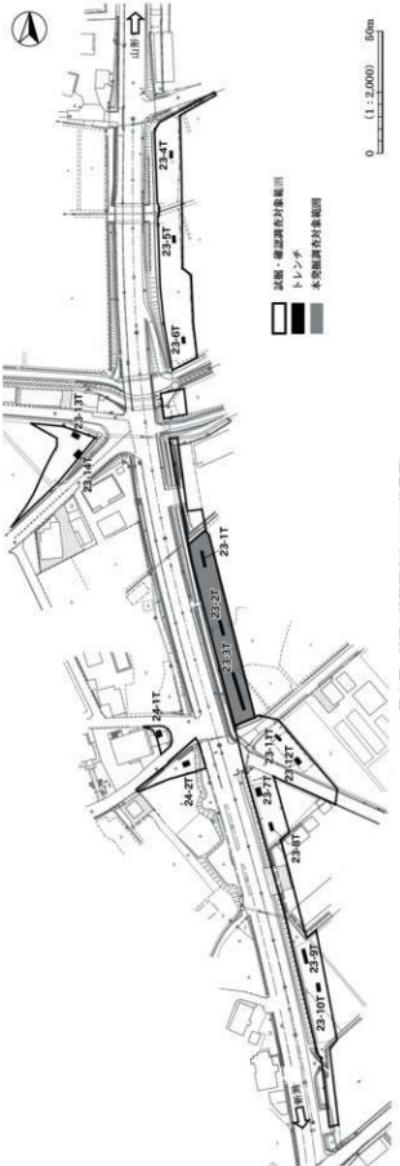
事業化が決定した後、国土交通省（以下、国交省）と新潟県教育委員会（以下、県教委）との間で事業用地内での埋蔵文化財の取り扱いについての協議が開始された。

本遺跡の範囲は2010年度（平成23年度）3月に国交省から県教委が試掘調査の依頼を受け、県教委から埋文事業団が委託され試掘調査を行った。出土遺物から平安時代から中世の遺跡と判明し、孤屋敷遺跡として周知化、2012年度（平成24年度）に本発掘調査を実施することになった。

2 調査の経過

A 試掘・確認調査（第2図）

試掘調査は2011年5月16・17日に試掘坑23-1トレンチ（以下、略号Tとする）～10T、確認調査は11月24日に23-11T～14Tを任意に設定し、重機（バックホー）及び人力による掘削・精査を行って、遺構・遺物の有無を確認した。その後、トレンチ位置、土層堆積状況等を図面・写真等に記録した。遺物はトレンチごとに出土層位を記録し取上げた。遺構はトレンチ断面の観察を通してその掘り込み位置を確認した。調査対象面積3,346m²に試掘坑14か所で実質調査面積は90.5m²、試掘確認率は2.7%である。



第2図 試掘・確認調査トレンチ位置図

検出した遺構は、23-1Tから中世以前の溝あるいは自然流路1条を検出した。23-2Tで多く検出した遺構は近世の可能性が高かった。23-3Tで検出した土坑は中世以前と考えた。23-1Tから北側の道路センター杭No.34～39までは、表土直下に砂利層を検出し、三面川の氾濫原であることを確認した。23-3Tから南側は遺物包含層相当のⅢ層が徐々に厚くなることから中世以前の水田域と想定した。しかし、南側については間層のない累重した堆積で水田遺構を検出しにくい状況であったことから、本発掘調査対象から除外した。

出土した遺物は、23-1～3Tでは水田耕作土のI・II層および遺物包含層としたⅢ-1・Ⅲ-2層から中世の珠洲焼7点、白磁の楕1点、土師質土器3点、越前焼1点、古代の土師器2点、近世陶磁器9点、近世の可能性が高い鉄滓1点である。本発掘調査範囲外とした23-8・11Tから珠洲焼甌がそれぞれ1点出土した。

23-1TではV層上面で中世以前の溝、23-3TではIV層上面で中世の土坑を検出したことから、675m²×2層の本発掘調査が必要であると県教委および国交省に報告した。遺跡名は小字名から「狐屋敷遺跡」とした。

2012年8月22日には、新たに用地買収が終了した194m²について、24-1T、24-2Tの2地点を設定し確認調査を行った。24-2Tでは、安定した土層の堆積状況であったが、遺構・遺物は検出できなかつた。24-1Tでも遺構・遺物は検出できず、本発掘調査は不要となつた。調査面積は10.8m²で確認率は5.6%であった。同日、道路センター杭No.40～47付近の工事範囲について、ボーリング・ステッキによる簡易試掘調査を行つた。この区間は狭小であることから2011年に試掘坑が入れられなかつた範囲である。結果的には、アスファルト敷きや道路法面がほとんどで、旧表土まで達することができず、調査結果から遺跡の有無を判断することはできなかつた。しかし、周辺の地形を見ると本発掘調査不要と判断したNo.39付近よりも三面川へ向かって傾斜しており、三面川の氾濫原であることは明らかであった。2011年の試掘調査結果と同様にこの区間にても遺跡の存在する可能性は低いと考えた。以上のことからNo.40～52の区間についても本発掘調査は不要であると県教委および国交省へ報告した。

B 本 発 挖 調 査

本発掘調査は2012年4月16日から調査事務所の設置・進入路・排土置き場の鉄板敷設・安全柵の設置等の準備工を行つた。表土除去作業は4月23日～26日まで調査区の北から南へ向かって行つた。調査区は東西約8m、南北約80mと細長いことから、当初南側約20mは表土除去を行わず、排土の仮置き場とした。表土除去作業は、試掘の結果から遺物が希薄であるとの想定から、表土及び遺物包含層を重機で慎重に除去した。遺物は、北側のSR1で中世～近世陶磁器が数点出土したのみである。本遺跡は試掘調査の結果から、IV層上面とV層上面で遺構確認を行つたが、IV層上面では近世の遺構が多く明確に中世の遺構が検出できず、最終的にはV層上面で検出した。5月7日から作業員で遺構検出作業を行つた。検出した遺構は隨時半裁を行い、断面の写真撮影・測量等必要な記録を取つた後に完掘し、写真撮影・測量を行つた。7F～10Fグリッドの遺構は中世の遺物が出土するものの、近世陶磁器と共に伴するもの、近世陶磁器のみが出土するものも多く、近世を中心とする遺跡との判断であった。

調査が進み、排土を仮置きしていた部分の表土除去を5月14・15日に行つた。4F～6Fグリッドの遺構調査が進み、深いピットや土坑・井戸などを検出し、井戸(SE19)からは珠洲焼が出土するなど中世遺物の出土が多くなり、これらのグリッドは中世の遺構と認識した。遺構密度もこれらのグリッドが高

3 調査体制

い。近世の遺構か中世の遺構かは、覆土では識別できなかった。

5月23日、土坑（SK9）としていた遺構の完掘作業を行っていたが、長さ25cm程の長楕円形の礫が多く出土したが、井戸の礫組と気づくのが遅れ、礫の一部を取り除いてしまった。

5月24日には県教委から終了確認を得た。調査区西側の現水路部分については、中世の遺跡が広がっていると考えられることから、4F～6Fまでの30mについて水路移設後に調査が必要であると国交省に報告した。

5月30日には井戸（SE34）から井戸側の枠木が出土したが、多くが調査区外に広がっていたため、全体の掘形は確認できなかった。6月1日には全体の完掘写真を高所作業車で撮影した。

6月2日には地元村上市小川集落の方々を対象に現地説明会を開催し、27名の方に参加いただいた。

6月4日には最後に残っていた礫組井戸（SE22）を掘削し、水溜の桶を検出した。6月6日に完掘写真の撮影・測量を行い、調査を完了した。6月11日には調査現地を国交省に引き渡した。6月13日には、本発掘調査の北側のセンター杭No.31付近の工事立会を行った。この場所は2011年度の試掘調査で遺跡の範囲内としていたが、狭小なため試掘調査ができなかった地点である。SR1の覆土と見られるシルト層を確認したが、ほかの遺構は検出できず、遺物も出土しなかった。

4月～6月の調査結果から、調査区西側にある水路下にも遺跡が広がることを想定していたが、過去の水路工事の際に遺跡が破壊されている可能性もあったことから、8月27・28日に水路のコンクリートの一部を撤去し、状況を見た。その結果、水路底面のコンクリート下は直径20～30cm程度の栗石と厚さ50cmの砂利が入れられ、遺跡はすでに破壊されていることが判明した。このことから本発掘調査は不要であると県教委および国交省に報告した。

3 調査体制

試掘確認調査・本発掘調査は、以下のような期日と体制で行った。

A 試掘・確認調査

調査年度	2011年度（平成23年度）	2012年度（平成24年度）
調査主体	新潟県教育委員会（教育長 武藤克己）	新潟県教育委員会（教育長 高井盛雄）
調査機関	財團法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団	財團法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団
管 理	木村 正昭（事務局長）	木村 正昭（事務局長）
	今井 豊（総務課長）	熊倉 宏二（総務課長）
	北村 亮（調査課長）	北村 亮（調査課長）
庶務	伊藤 忍（総務課班長）	伊藤 忍（総務課班長）
調査期間	2011年5月16・17日、11月24日	2012年8月22日
調査担当	鈴木 俊成（調査課試掘・確認調査担当課長代理）	波邊 裕之（調査課試掘・確認調査担当課長代理）
調査職員	朝岡 政康（ 同 主任調査員）	朝岡 政康（ 同 主任調査員）

B 本発掘調査

調査期間	2012年4月16日～6月11・13日、8月27・28日	
整理期間	2012年6月12日～2013年3月29日	
調査主体	新潟県教育委員会（教育長 高井盛雄）	
調査機関	財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団	
管理	木村 正昭（事務局長） 熊倉 宏二（總務課長） 北村 亮（調査課長）	
庶務	伊藤 忍（總務課班長）	
調査指導	田海 義正（調査課本発掘調査担当課長代理）	
調査担当	佐藤 友子（ 同 専門調査員）	
支援組織	藤村ヒューム管株式会社	
現場代理人	金子 政彦（藤村ヒューム管株式会社埋蔵文化財調査部現場代理人）	
調査員	郷 実（ 同 調査員）	

4 整理作業

整理作業は、前項の本発掘調査と同じ体制で行った。遺物の洗浄は現地事務所で行った。遺物の注記・接合・復元・実測作業の一部は、2012年度にもう一か所調査していたカヤマチ遺跡の現地調査と平行して進めた。遺物の実測・デジタルトレース、写真撮影、台帳類の整備、図面類の修正、図版レイアウト、原稿執筆などはカヤマチ遺跡の現地調査終了後の9月19日から12月28日まで藤村ヒューム管株式会社整理所で本格的に行なった。2013年1月～2月は編集・校正作業を行い、3月には印刷・刊行した。

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

1 地理的環境（第3図）

孤屋敷遺跡は2008・2009年度に日本海沿岸東北自動車道関係で発掘調査を行った古渡路遺跡と近接する。したがって、本報告の第Ⅱ章については、『新潟県埋蔵文化財調査報告書第221集古渡路遺跡』〔真田・野水ほか2011〕の本文の一部を引用し、改変・加筆した。

本遺跡は2008（平成20）年4月の合併によって再編された村上市に所在する。新「村上市」は、村上市・山北町・荒川町・朝日村・神林村の旧5市町村からなり、合併後の面積は1,174.24km²と県下最大規模で、人口は約7万人を擁する。県内最北端の自治体であり、北と東は山形県鶴岡市・西村山郡西川町・西置賜郡小国町と、南は岩船郡関川村・胎内市と境を接し、西は日本海に面している。

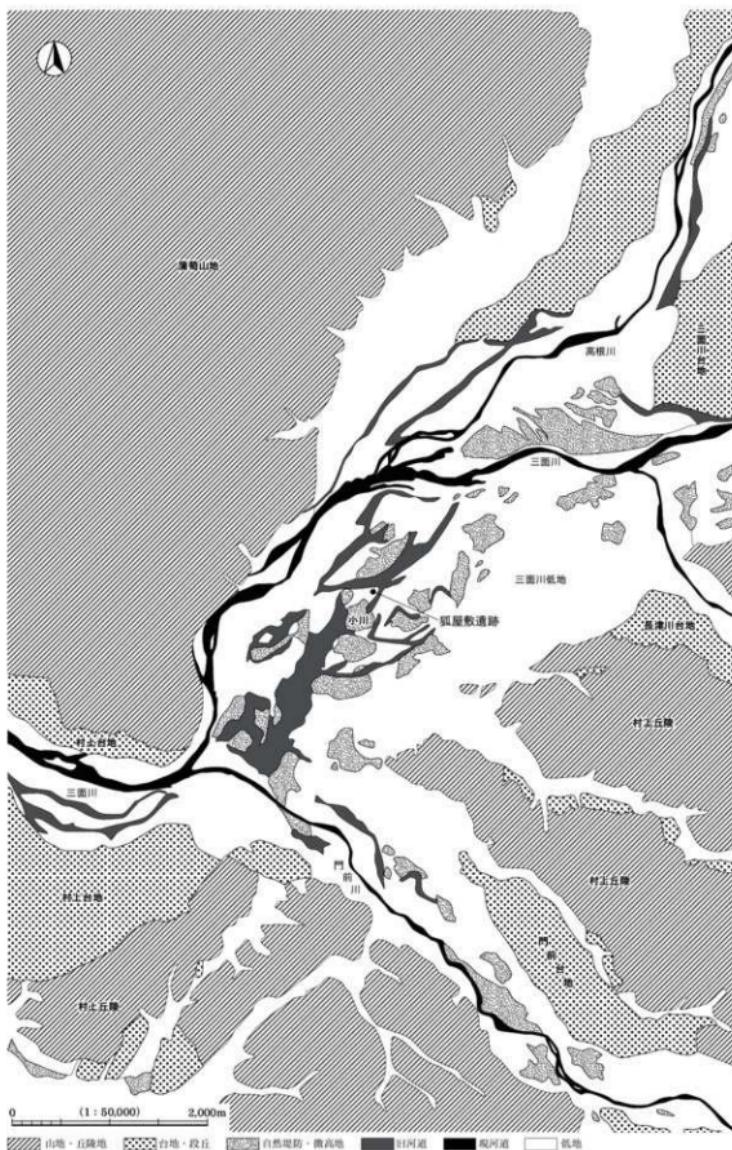
広大な市域では北部から南東部にかけて険しい壯年期の山容の朝日山地や、そこから断層運動によって分断されたとされる葡萄山地の山々が連なる。山地の縁辺部には村上丘陵が、三面川の中流域には三面川台地、下流域には村上台地が広がる。平野部では東部の山岳地帯を源流とする三面川が高根川や門前川等の大小の河川を集めながら西流し、新潟平野の北部にあたる肥沃な沖積地¹⁾を形成している。三面海岸部では砂丘が発達し、岩船港付近が新潟市西蒲区の角田山北麓から海岸線に沿って伸びる長大な砂丘列（新潟砂丘）の北限にある。

越後平野は勾配が極めて少ない平野の上、成長した砂丘群によって河水の海への流入が阻害された結果、平野を流れる河川はしばしば流路を変え、低湿な平野の各地には多くの河跡湖・潟湖が形成された。そして、まるで網の目のように各地の湖沼を結ぶ河川網は、船運による内水面交通の発達を促すこととなる。

慶長2（1597）年に描かれたとされる「越後国瀬波郡絵図」（米沢市上杉博物館所蔵）には、かつて浦田山丘陵の南に存在した琵琶潟（岩船潟）や、「やち」「野地」と表記される葦の茂る湿地帯、荒川や三面川をはじめとする大小の河川が数条に別れて亂流する様子が描かれており、当時の村上の景観をよく伝えてくれる。また、そこに描かれる景観は、古来より幾度となく繰り返されてきた治水事業や干拓事業によって失われた越後平野の原風景でもある。

遺跡周辺の微地形を確認する。本遺跡は、三面川と門前川に挟まれた三面川低地に所在する。この三面川低地の左岸には、旧河道や自然堤防および微高地が多く所在する。遺跡の中心部は現小川集落が形成される自然堤防あるいは微高地の東端にある。調査区の北端は第3図の地形図では旧河道に、南端は北東から南西へ延びる旧河道域に立地する。これは1947年に撮影された米軍撮影の写真にも明瞭に痕跡が残る。1891（明治23）年作成の土地校正図には調査区の北側が畑、南側が水田となっている。調査前は7Fグリッド（第5図参照）から北側が水田、5・6Fグリッドが畑、3・4Fグリッドが水田であった。遺跡が検出できる標高は12.0m前後である。

1) 第3図では三面川低地としている。低地には谷底平野・氾濫平野・扁状地を含む。低地には自然堤防・微高地も含むが、遺跡が立地することが多いことから、第3図には省略せずに表示した。



第3図 周辺の地形 [鈴木信夫ほか1987・1991]を簡略化して作成

2 歴史的環境 (第4図・第1表)

A 中世の歴史的環境

藤原北家の流れを汲む中御門家の家領「小泉荘」は仁平3(1153)年に金剛心院領「小泉荘」として中世荘園へと変貌を遂げた。当時、京都の中央政界は鳥羽院政期にあたり、各地で広大な荘城をもつ中世荘園(寄進地系荘園)が続々と形成された時期にある。小泉荘もそのひとつで、鳥羽院の御願寺である金剛心院造営の経費を負担するため立莊されたものである。中御門家は、家領「小泉荘」を寄進することでの造営にあたった院近臣の庇護を得るとともに、自らは領家として権益を保持した。

この新たに成立した小泉荘は周囲の国衙領を開いた非常に広大な荘域を有する。その範囲は旧岩船郡のほぼ全域にわたり、旧岩船潟の東岸に位置する有明付近を境に北を「本庄」、南を「加納」という。本遺跡はこの小泉荘本庄に位置している。本庄はおよそ旧村上市や旧朝日村にあたり、加納は旧神林村にあたり。また、加納の南には国衙領の「荒川保」が位置していた。

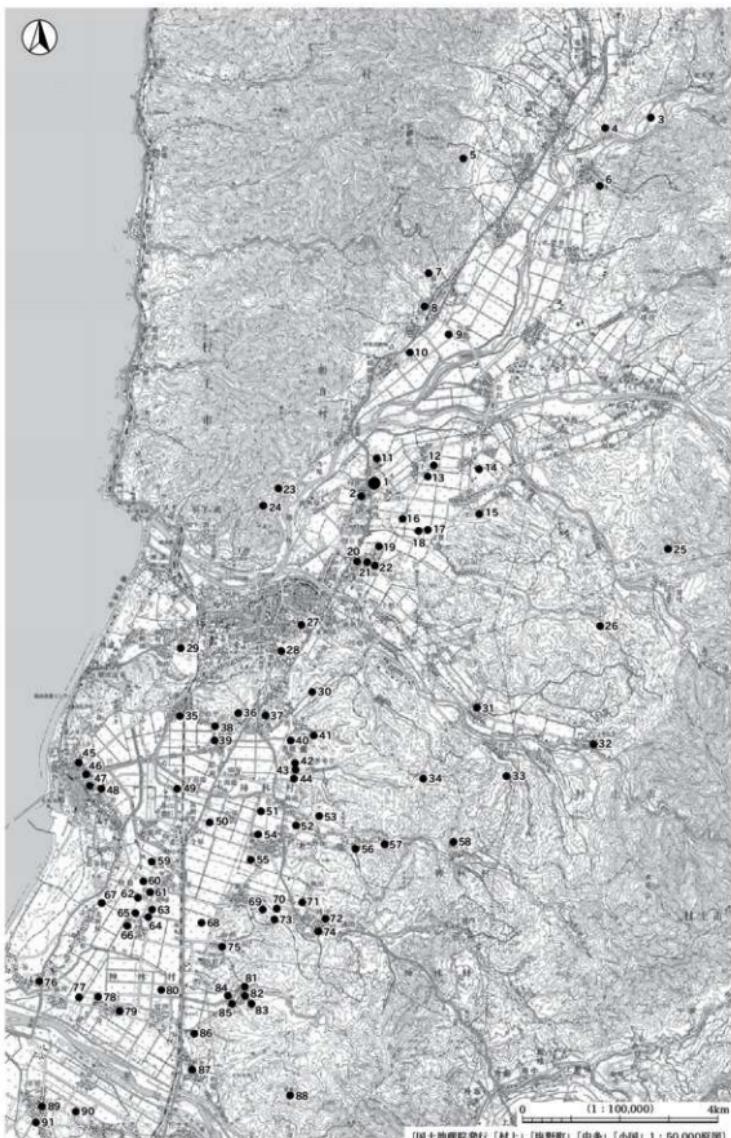
鎌倉時代初めに小泉荘の地頭職に補任された有力御家人の秩父季長は、嫡子行長に本庄を、庶子為長に加納を分割譲渡した。本庄を受け継いだ行長は小泉姓を名乗り、加納を受け継いだ為長は色部姓を名乗る。小泉氏は建武新政までは小泉氏を称するが、持長が康永2(1343)年以降に小泉荘本庄の領有を強く主張するため本庄氏と改姓した。

中世荘園の領有体系は中央に住む荘園領主に対して現地の荘官が年貢の納入を請け負うというもので、それぞれの職に付随した権益が担保されていた。そこに割り込んできた地頭は下地中分(土地の折半)、地頭請所(年貢徵収・納入の請負)などの契約、時には非合法な手段を用いて、荘園領主の権益を次第に蚕食していく。

しかし、小泉荘本庄は鎌倉時代末に幕府の直轄地である関東御領に編入され、後醍醐天皇の建武政權では没収地として他国の武家に分配されるなど、他勢力からの干渉の多い地域だった。したがって、本庄氏の地頭としての領主支配は後退と進展を繰り返すが、南北朝の動乱期を通して、本庄氏は次第に荘園領主の権限をも排除する有力な地領主、すなわち国人領主としての地位を固めていった。

No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代
1	葛尾村	古代・中世	25	粟平城跡	中世	48	若狭御所跡	中世	68	奉行松	古代・中世・近世
2	佐小山御跡	中世	26	山田御所の下	中世	49	宮ノ下	中世	69	飯岡城跡	中世
3	馬立塚	中世	27	村上城跡	中世・近世	50	千作リ	中世・近世	70	草田	中世
4	早原御城跡	中世	28	牛糞御城跡	中世	51	牛糞	中世・近世	71	桃川内田	古代・中世・近世
5	瓶尾御城跡	中世	29	松山寺野	中世	52	瓶尾	中世	72	坂下	中世
6	間口御跡	中世	30	玉手村	中世・近世	53	穂波	中世・近世	73	桃川山跡	不明
7	鷺ヶ崎跡	中世	31	山崎	中世	54	城田	中世	74	桃川御跡	中世
8	上野地	中世	32	小堀	中世	55	有明御跡	古代・中世・近世	75	山田御敷道	古代・中世
9	上野大木	中世	33	青沼(かなぐさ)越沢	古代・中世	56	伊地	古代・中世・近世	76	十日町	中世
10	垂木田	中世	34	垂木城跡	不明	57	駒下	近世	77	西野	古代・中世
11	桶木尾	中世	35	七瀬御跡	古代・中世	58	有明御跡	古代・中世・近世	78	中野	中世
12	下新高田	古墳・中世	36	六太郎	中世	59	牛屋御跡	中世	79	牛屋御跡	中世
13	空の城	古生・中世	37	土御前前田	中世	60	十一曲	中世	80	道上裏	中世
14	島井田	中世	38	豪ノ前	中世	61	木原木人	中世	81	松沢御敷	古文・古代・中世
15	大栗御城跡	中世	39	明吉田	古代・中世	62	曲大平城跡	中世	82	鮮池	古文・古代・中世
16	古御跡	中世	40	ケケ田	中世	63	豊田	中世	83	松川御跡	中世
17	垣山	中世	41	大場沢	中世・近世	64	田屋道	古代・中世	84	下谷地東	古文・古代・中世
18	坊山城跡	中世	42	西御堂	中世	65	牧田御跡	中世	85	松沢今田	古文・古代・中世
19	谷地	中世	43	内御堂	古代・中世	66	松陰東	古代・中世	86	宿田城跡	不明
20	御所御跡	中世	44	水戸	古代・中世	67	木下2	中世	87	平林町屋	中世
21	天神前田	中世	45	水戸	古代・中世	68	水下1	中世	88	平林城跡	中世
22	大船跡	中世	46	若船二日市	中世	69	木下4	中世	89	馬場御跡	中世
23	豊谷城跡	中世	47	若船大町	中世	70	猪田	古代・中世・近世	90	石橋B	中世
24	下波山城跡	中世	48	若船上町	中世	71	在付日	古代・中世	91	赤井	古代・中世

第1表 周辺の主要遺跡(中世)



第4図 周辺的主要遺跡（中世）

阿賀野川以北にはこの本庄氏のような国人領主が割拠しており、彼らは阿賀北衆（揚北衆）と総称される。白河荘の安田氏・水原氏・下条氏、加治荘の加治氏・新発田氏、奥山荘の中条氏・黒川氏、築地氏、羽黒氏などがそれである。小泉荘では本庄氏をはじめ、色部氏、鮎川氏、小河氏などの国人衆が分立し、抗争を繰り広げた。

小河氏・小川館について

小河氏 「本庄氏系図」によれば、小河氏が本庄氏から分かれたと認識できるのは、戦国期の小河長資である。長資は本庄一族で「小河右衛門尉」と名乗り、「家臣小河彈正左衛門長広」の養子となつたとある。小河氏は小泉荘内の「村殿」一村落領主としてすでに確固たる位置を占めており、その領主家に本庄氏が養子を送り込んだとみられる。「村殿」は一村ごとの領主で、おそらく平時は農業に從事し、本庄氏の軍事催促があると戦争にでかけていくような、半農半武士の生活をしていたとみられる。したがつて、本庄氏に隸属するような領主関係ではなかったと思われる〔長谷川 1999〕。

小河長資は天文 8 (1539) 年に兄である本庄房長に対し謀反を起こし、同 20 (1551) 年 8 月 8 日に甥の本庄繁長に耕雲寺で切腹を命じられ小河氏は滅亡する。

小川館 小川集落は、小河氏の本拠であったが、天文 20 (1551) 年同家の滅亡によって荒廃し、後に本庄氏の家臣石栗将監が入つたものと考えられる〔田中・大場 1999〕。集落の中に「伝小川館跡」(2) があり、現在の金源寺（元和元（1615）年に同市寺尾から移築された）境内が館跡に比定されているが、規模は全く不明である。金源寺境内の北側の竹林は「タテノウチ」という通称が残り、地元では建物を建てられない場所とされる。金源寺の周辺には現在も石栗姓の家が多い。

小川村は前掲の「瀬波郡絵図」には「鮎川・大国但馬分小河村（地味）中 本百姓十三軒」とあり、近世は村上藩領となる。1889（明治 22）年の町村制施行により鮎腰村の一字名となる。1950（昭和 25）年には朝日村となり、2008（平成 20）年には村上市と合併し現在に至る。現在の国道 7 号は集落の東端を廻って北の水明橋に続くが「瀬波郡絵図」には西端を廻って道路が描かれている。現在地に道路が移動したのは昭和に入ってからである。

B 中世の遺跡

本遺跡の周囲には小泉荘本庄を根拠地とした国人領主層やその家臣が居住した中世城館や、館伝承地が数多く分布する。遺跡の東方約 2.3km の丘陵上には大葉沢城跡(15)、南約 1.7km の独立丘陵には大館跡(22)、南西約 3.4km の臥牛山上には村上城跡(27)が、北東約 5km には猿沢城跡(7)が所在する。

大葉沢城は鮎川氏の居城とされ、50 数条の歓形阻塞などが今も現存し、戦国期の山城の形式をよく残していることから、新潟県指定史跡となっている〔田中・大場 1999〕。

坊山遺跡(17)は、平成 2 年に発掘調査が行われ、13 世紀末頃の製鉄関連遺跡であることが判明した〔赤羽 1991〕。背後に大葉沢城があることから、坊山遺跡も鮎川氏が関わっている可能性が高いとされる。

大館跡は東西約 110m、南北約 100m の大規模な方形居館で、日本海沿岸東北自動車道建設（以下、日沿道とする）に伴い東堀部分を中心に 2007・2008（平成 19・20）年度に発掘調査が行われた。15 世紀を中心に 13～15 世紀の遺物が出土している。館の規模や皆朱漆器・京都産土師質土器、大型の鉄鍋といった希少品が出土し、本庄氏に関係する館と推定されている〔青木ほか 2008・2009〕。

村上城は近世初頭に次々と入封した堀氏・本多氏・松平氏の改修によって近世城郭に姿を変えたが、以前は典型的な戦国期の山城であり本庄氏の居城であった。前掲の「瀬波郡絵図」では「むらかみようがい」

と記されている（第6図）。

猿沢城跡は山麓居館部と山城からなる根小屋式城郭で、構造から中心時期は16世紀後半とされる〔横山・田中2005〕。

これらの城館跡に囲まれた低地部の中世集落遺跡として上野太田遺跡（9）・古渡路遺跡（16）・谷地遺跡（19）・下新保高田遺跡（12）が存在する。上野太田遺跡は日沿道の試掘調査で発見された。三面川右岸の微高地上に局所的に存在する集落で、時期は14～15世紀とされる〔加藤2008〕。谷地遺跡では主に15世紀の所産とされる珠洲焼や、越前焼、白磁、瓦質土器が出土している〔大島ほか2010〕。下新保高田遺跡は14世紀を中心とする集落で、遺構や出土遺物から富裕農民層の集落と推定されている〔青木ほか2010〕。また、古渡路遺跡では14世紀初頭～15世紀中頃の遺物が出土している。

本庄氏の居館と推定されている大館跡と、本遺跡を含めたこれらの中世集落は活動時期をほぼ同じくしており、すでに指摘されているように〔大島ほか2010〕、大館跡の北に広がる沖積地の集落の形成には本庄氏の影響が強いと推測される。

第III章 調査の概要

1 グリッドの設定（第5図）

グリッドは道路法線のセンター杭 No.27 と No.30 を結んだ線を基軸とし、10m 単位の方眼を組んだ。およその南北方向を算用数字 1 ~ 11、東西方向をアルファベット大文字 A ~ F で表し、大グリッドとした。大グリッドの中には、更に 2m 単位の小グリッド 1 ~ 25 に分割した。グリッドの表記は「5F10」等とした。グリッドの基準線方位は真北(X 軸)から 14° 40' 37" 西偏している。7F1 グリッドの座標値(世界測地系)は X : 249888.452, Y : 87843.791 である。

実際の調査範囲より大きくグリッドを組んでいるのは、本発掘調査後に 3B, 1・2A ~ D の範囲がその後の確認調査の結果によっては、本発掘調査が必要になる可能性があったからである。

2 基本層序（第5図）

2011(平成23)年の試掘調査では、IV 層上面と V 層上面の 2 面で中世の遺構確認を想定していた。しかし、本調査で遺跡全体の様相が分かり、南北約 80m の中で土層の堆積状況がかなり異なり、23-IT で検出した満あるいは自然流路かとされた層は、自然流路 SR1 (平安~近世) の最深部であることが判明した。また、遺物包含層とした III-1・III-2 層は分層できるところがわずかであった。IV 層上面で遺構確認を行ったところ、近世以降の遺構が多くあった。そこで、V 層上面まで掘削して遺構確認を行った。すると近世の遺構も若干混じるが、中世の遺構がより明確になった。

基本層序図③の地点（平面では 5F3・8・9・13 グリッド）から SR1 まで（9F4 グリッド）の中央部は若干標高が高く酸化が著しい。北側と南側は地下水位が高いため土層は還元し、色調で調査区全体が三分される。北側は SR1、南側は SR28 の影響と考えられる。

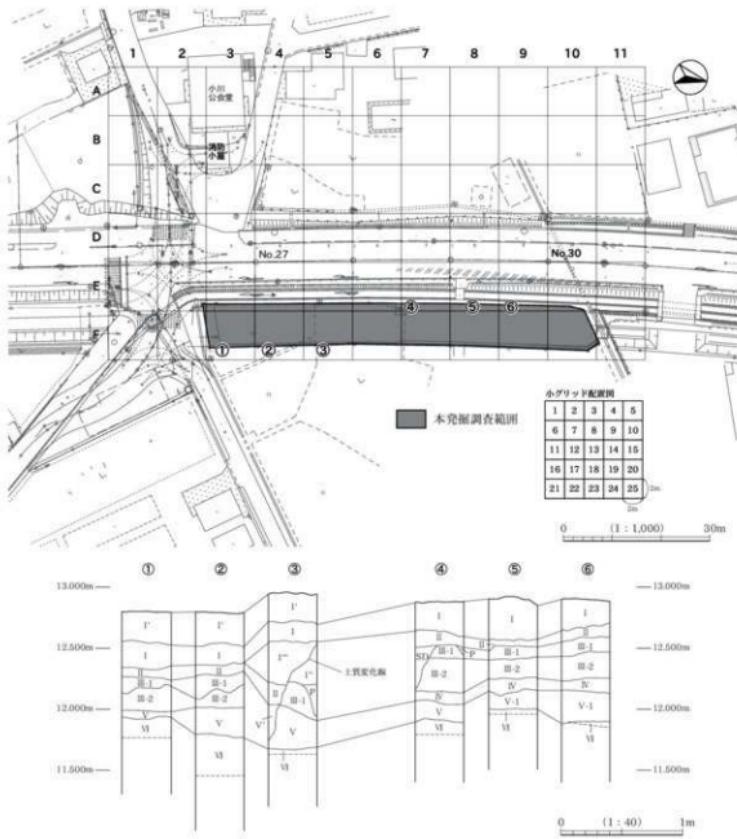
- I' 層：灰黄褐色 (10YR4/2) シルト 調査以前の水田畦畔である。粘性・しまり共に有り。
- I 層：灰黄褐色 (10YR4/2) シルト 調査以前の水田耕作土である。粘性・しまり共に有り。
- I" 層：暗灰黄色 (2.5Y5/2) シルト 調査以前の水田耕作土である。調査区の南側のみに有る。粘性強・しまり有り。
- I''' 層：オリーブ褐色 (2.5Y4/4) シルト 調査以前の水田耕作土である。粘性強・しまり有り。
- II 層：暗灰黄色 (2.5YR4/2) シルト 調査以前の水田の床土である。炭化物多く含む。南側調査区では 4 ~ 5cm 大の礫多く含む。粘性・しまり共に有り。
- III-1 層：オリーブ褐色 (2.5Y4/3) ~ 明黄褐色シルト (2.5Y7/6) 調査区南側では I' 層を含む。近現代~中世の遺物包含層である。酸化が著しく、やや濁っている。粘性やや強、しまり有り。
- III-2 層：オリーブ褐色 (2.5Y4/6) シルト 酸化著しく、III-1 より明るく濁らない。近世~中世の遺物包含層である。粘性・しまり共に有り。
- IV 層：オリーブ褐色 (2.5Y4/6) シルト 上面が上層の遺構確認面であるが、南側では確認できない。近世以降の遺構が多い。粘性やや強、しまり有り。

V 層：黄褐色（2.5Y5/4）シルト 粘性・しまり共に有り。上面が下層の遺構確認面である。中世の遺構が主体で一部近世遺構も含まれる。覆土での見分けは困難で、出土遺物により時期を分けた。

V-1 層：オリーブ褐色（2.5Y4/6）シルト 北側は砂多く含み粘性は無いが南側は粘性有り。

V' 層：黄褐色（2.5Y5/3）シルト 南側にのみある。V層より粘性強・しまり有り。

VI 層：オリーブ褐色（2.5Y4/6）～黄褐色（2.5Y5/3）砂 やや粗い砂である。粘性・しまり共に無し。



第5図 グリッド設定・基本層序図

第IV章 遺構

1 概要

調査区の北側には、三面川の旧流路あるいは支流の可能性があるSR1が所在する。平面規模は調査区内では確認できなかった。SR1から南側の7Fグリッドまでにある東西方向に走る溝は、覆土から近世陶磁器やビニールが出土していることから近世～現代までの烟作溝と考えた。ピットも多数あるが、同じく近世～現代までのものとされた。一部には中世の遺構であるSK2もあることから、中世のピットもあるが、遺物が出土していないものが多く、覆土の違いでは時期は明確には分けられなかつた。7Fグリッドから南側で検出した遺構の多くは中世の集落遺構と考えている。ピットも多く検出し、深さ50cmを超えるものもあったが、掘立柱建物になるものは無かつた。集落は調査区の東側の現水田域や西側の現小川集落方面に広がっていると考えられるが、調査区西側に隣接する水路下は昭和40年代に行われた造成工事で遺跡は破壊されており、更に西側の旧消防小屋のあった場所や果樹園跡は2012（平成24）年の確認調査では遺構・遺物は検出しなかつた（第1章2参照）。

遺構は種別に問わらずすべて通し番号を付した。遺構種別は、井戸：SE、土坑：SK、小孔・柱穴：P、自然流路：SRの記号を用いた。

2 遺構各説（図版5～7・11～18）

遺構の個別説明は、井戸・土坑・ピット・自然流路の種別ごとに番号の小さいものから行う。

A 井戸

SE9 6F3・4グリッドで検出した礫組井戸¹⁾である。長軸204cm、短軸189cmの楕円形で、深さは149cm、断面形は漏斗状である。当初土坑と認定して調査を行っていたが、完掘段階で底面が更に深いことから井戸と認識を改めた。礫組井戸と認定するのが遅れ、北側の一部の礫を撤去してしまっている。上部の埋土は、暗オリーブ褐色（2.5Y4/4）シルトで0.5～3cm大の炭化物と15cm大の礫を多く含んでいた。

礫組は上端から70cmほど下がった位置から大型礫を2段、下に小型礫を3段組んでいる。礫組みは120個の楕円形・長楕円形の礫を使用している。礫の大きさは長さ10～35cm、幅5～23cm程度である。石材は石英閃緑岩・安山岩・黒色安山岩・粗粒砂岩等を使用している。いずれも近接する三面川の河原で採取できるものである。1点中世の敲石が礫組に使用されており図化した（図版9-21）。湧水層のX層は暗灰黄色（2.5Y4/2）礫層で、水に含まれる鉄分が酸化し黒化した2～12cm大の礫が多い。

1層から瀬戸美濃焼の古瀬戸様式の瓶類の頸部～体部片（図版8-1）が1点、珠洲焼片口鉢の口縁部片（図版8-2）が1点出土している。珠洲III～IV期ころのものである。

1) 石組井戸には、自然礫そのまま使用した礫組井戸と、長方形等に切り出した石を使用する切石組井戸がある。越後ではこれまで切石組井戸は検出されていない。

SE19 5F4・5・9・10 グリッドで検出した不整円形の素掘りの井戸である。長軸 239cm、短軸 221cm、深さ 114cm である。断面形は半円状で底面中央はわずかに窪んでいる。1 層から青磁碗高台部破片 1 点（14世紀～15世紀）、珠洲IV期の甕口縁部（図版 8-3）、2 層から 14 世紀後半の青磁碗（図版 8-4）が 1 点出土している。

SE22 5F8 グリッドで検出した円形の礫組井戸である。長軸 151cm、短軸 136cm、深さ 169cm である。断面形は漏斗状である。礫組は上端から 90cm ほど下がった所から 4 ～ 5 段組まれている。礫の总数は 159 個で、長さ 10 ～ 33cm、幅 10 ～ 20cm の楕円形・長楕円形である。石材は安山岩・黒色安山岩等である。水溜めには底板を抜いた結桶（図版 9-24）を使用している。蓋は腐食し、ほとんど残っていないかった。側板は上端部の腐食は無いが、下端部は腐食が進んでいるものが多い。結桶は X 層の湧水層に設置されている。埋め戻されており、埋土の 1・2 層には礫が多く含まれる。2 層の下部から長さ 55cm、幅 10cm の板材が出土したが、腐食が著しい。陶磁器類の出土遺物は無いが、結桶は 15 世紀後半以降越後で使用されていることから井戸の時期は 15 世紀後半以降である。

SE34 4F12・13 グリッドで検出した井戸である。調査区の東端で検出したため、掘形のほとんどが開渠と調査範囲外になる。平面形はほぼ円形か。掘削できた深さは 86cm であるが、湧水層までは達していないと見られる。深さ 80cm 付近で井戸側の枠木 4 点（図版 9-25 ～ 28）と隅柱の可能性のある腐食した木片 1 点を検出した。枠木 4 本のうち 2 本は法面に入ったままの状態であった。隣接する水田が崩落する危険があったことから、枠木のみを取り出して調査を終了した。枠木は井戸上部で組んであったものが落下して底部付近で崩れて出土したものと考えている。枠木は一辺 60cm の方形となり、両端に入れた切り込みと角柱の隅柱を組み合わせたと考えられる。上部の埋土は黄褐色シルト層である。井戸の時期を示す陶磁器類の出土は無いが、III-2 層上面からの掘り込みであることから中世以降と考えられる。

B 土 坑

SK2 9F11 グリッドで検出した土坑で、調査区東端で検出した。平面形は方形か。断面は弧状で、深さは 47cm である。1 层から青磁碗の体部小片が 1 点、古代の土器内面黒色の杯の体部片が 1 点出土している。9 世紀後半～10 世紀初頭のものと見られる。出土遺物から遺構の下限は中世と考えられる。

SK8 6F12・13 グリッド検出の土坑である。半分以上は東側の調査区外に延びる。平面形は長方形か。断面形は弧状で底部に浅い窪みがある。深さ 23cm である。覆土は单層である。1 层から瀬戸美濃焼の盤と見られる体部片が 1 点出土している。古瀬戸様式で 14 世紀～15 世紀初頭のものである。

SK18 5F2・3 グリッド検出の土坑である。平面形は長方形、断面形は台形状である。短軸は 205cm、深さ 54cm である。1 层から珠洲焼片口鉢部片が 5 点出土している。図化した（図版 8-5）口縁部が残っているものは珠洲VI期ころのものである。2 層から越前焼の甕胴部片が 1 点出土している。15 世紀後半～16 世紀代のものである。

SK20 4F9 グリッド検出の土坑である。SR28 が埋没した後に掘削されている。平面形は楕円形、断面形は弧状である。長軸 157cm、短軸 133cm、深さ 17cm と浅い。覆土は单層である。試掘（23-3T）時に土坑と認定し、珠洲焼 1 点と甕 3 点が出土していると報告しているが、出土層位が 2 層となっていることから、SR28 の覆土出土の誤りである。

SK21 6F6・7 グリッド検出の土坑である。平面形は楕円形で断面形は箱状である。長軸は 168cm、短軸は 126cm、深さ 55cm である。覆土はブロック状に堆積する。中・近世以降のビットで 2 か所切ら

れている。出土遺物は無い。

SK29 5F7 グリッド検出の土坑である。平面形は不整円形で、断面形は半円状である。長軸 145cm、短軸 120cm、深さ 61cm である。2 層から石臼（図版 8-22）が出土している。

SK30 4F13 グリッド検出の土坑である。平面形は楕円形、断面形は弧状である。長軸は 107cm、短軸は 77cm、深さ 20cm である。上から掘り込まれた中・近世以降のビットの覆土から砥石（図版 8-23）が出土している。

SK31 4F11・12 グリッドで検出した土坑である。平面形は円形で長軸 116cm、短軸 103cm、深さ 22cm、断面形は弧状である。覆土は単層である。1 層から珠洲IV期の片口鉢の体部片が 1 点出土している。

SK32 4F7 グリッドで検出した土坑である。平面形は楕円形で長軸 103cm、短軸 83cm、深さ 84cm、断面形は袋状である。SR28 の覆土中に掘られているが、後世に何らかの影響で SR28 の覆土が圧縮を受け SK32 の上端部が変形し、結果的に断面が袋状になったと想定している。

覆土はほかの造構とは極端に異なり、炭化物・腐植物を多く含む。炭化物・腐植物を最も多く含む 5 層の一部を洗浄したが、1~3cm 大の木炭が大量に含まれ、炭化米・種子類がわずかに採取出来た。また、未分解のワラ・腐植土を多く含む 7 層も一部を洗浄したが、炭化した種子類をわずかに採取した。これらの木炭の樹種同定、種子類の種実同定は行っていない。出土遺物は無い。

C ピット

P3 7F9 グリッドで検出した楕円形のビットで断面形は U 字形である。長軸 43cm、短軸 30cm、深さ 56cm である。覆土は単層である。1 层から近世の越前焼の甕の胴部片が 1 点出土している。

P4 7F7・8 グリッド検出の円形のビットである。断面形は U 字形である。長軸 43cm、短軸 37cm、深さ 27cm である。覆土は単層で、1 层から珠洲焼片口鉢の体部片が 1 点出土している。珠洲Ⅲ期ころのものである。

P5 6F5 グリッド検出の円形のビットである。断面形は漏斗状で長軸 40cm、短軸 34cm、深さ 44cm である。覆土は単層で、1 层から蓮弁文が施された青磁碗の体部片が 1 点（図版 8-9）出土している。13 世紀後半～14 世紀代のものである。

P6 6F8 グリッド検出の円形のビットである。断面形は漏斗状で長軸 32cm、短軸 28cm、深さ 26cm である。覆土は単層で、1 层から古代の土師器甕胴部片が 1 点出土している。

P10 6F3 グリッド検出の円形のビットである。断面形はやや変形した U 字形である。長軸 45cm、短軸 42cm、深さ 65cm である。覆土は単層で 1 层から古代の須恵器甕胴部片、土師器の長甕の胴部片が 1 点出土している。土師器は北陸系の長甕と見られ、外面に平行線文タタキが施される。

P11 6F3 グリッド検出の円形のビットである。断面形は U 字形で、長軸は 39cm、短軸は 37cm、深さ 37cm である。覆土は単層である。出土遺物は無い。

P15 5F10 グリッド検出の楕円形のビットである。断面形は漏斗状で長軸 63cm、短軸 54cm、深さ 43cm である。覆土は単層で、1 层から珠洲焼片口鉢の体部片が 1 点出土している。珠洲 V～VI 期ころのものである。

P16 5F10 グリッド検出の楕円形のビットである。断面形は弧状で、長軸は 65cm、短軸は 52cm、深さ 22cm である。覆土は単層で、1 层から 14 世紀後半の無文の青磁碗 1 点（図版 8-4）、珠洲焼片口鉢の体部片が 1 点出土している。珠洲 VI 期ころのもので御目が摩耗している。また、同層から 15 世紀後半

～16世紀代の越前焼の片口鉢・体部片が出土している。

P17 5F5 グリッド検出の楕円形のピットである。断面形は半円状で、長軸は76cm、短軸64cm、深さ42cmである。覆土は単層で、鉄滓が出土している。

P25 5F1 グリッド検出の円形のピットである。断面形はU字形で、長軸は48cm、短軸43cm、深さ39cmである。覆土は単層で、出土遺物は無い。

P33 4F10 グリッドSR28 の埋土中に検出した。隅丸方形のピットである。断面形はU字形で長軸は38cm、短軸33cm、深さ40cmで柱根(図版9-29)が残存していた。柱根は長さ(44.2)cm、幅23.0cm、厚さ(17.4)cmの角柱で腐食が著しいが、ピット底面には柱の当り痕跡(変色・硬化)が残存していた。単独での検出であるので詳細は不明であるが、SR28にかかっていた橋の脚の一つではないかと推測している。ピットは多数検出しているが、柱根が残存していたのはこの1基のみである。

D 自然流路

SR1 調査区北側の9・10F グリッドで検出した。自然流路の南岸と考えられ調査区内では北岸は検出できなかった。深さは54cmである。一部に幅220cmで深さ75cmになる部分があるが、試掘調査ではこの部分のみを自然流路あるいは溝とらえていた。覆土と地山との境は鉄分を多く含んだ水の影響で酸化した鉄分が多く沈着している。近接する三面川の旧流路あるいは支流の可能性を考えている。

遺物は小片がほとんどで図化できたものは珠洲焼の片口鉢1点(図版8-13)のみで珠洲Ⅲ期のものである。ほかに1層から阿賀北産の須恵器甕胴部片1点・珠洲焼甕の胴部片が1点・唐津の陶器椀1点・唐津の片口鉢1点(17世紀前半)、3層から珠洲焼甕胴部片4点(内1点は珠洲Ⅳ期ころか)・壺の胴部片1点・瀬戸美濃盤1点(14世紀～15世紀初頭)・袋物1点(14世紀後半～15世紀代・古瀬戸様式)・椀体部片が1点出土している。近世陶磁器では3層から肥前系磁器の袋物体部片1点・水滴1点(18世紀後半)・染付椀が3点(18世紀後半・江戸時代後期・江戸時代後期以降)などがある。4層からは瀬戸美濃焼の椀体部片が1点(14世紀～15世紀代)出土している。

出土遺物から平安時代から江戸時代後期以降まで、この場所は自然流路であった可能性が高く、その後水田に改変されたようである。1891(明治23)年の土地校正図では水田となっている。

SR28 4F グリッド検出の自然流路とした。幅は一定でなく300～450cm、深さ25cmで断面形は弧状である。覆土は単層で、本調査では出土遺物は無かった。地下水位が高く調査時は地盤が軟弱であった。SR28の南側では遺構・遺物はほとんど検出されなくなる。溝の可能性もあるが全体を把握できていないので現時点では自然流路としておく。SK20・SK32・P33に切られている。SK20のところでも述べたが、試掘時(23-3T)に珠洲焼甕1点が出土していることから中世の自然流路と考えられる。

第V章 遺物

1 概要

本遺跡出土遺物は陶磁器類・土製品・石製品・金属製品が合わせて平箱で2箱、木製品が4箱である。土器・陶磁器は第2表に時期別に産地と器種ごとに破片数を集計した。古代の須恵器甕には9世紀代の阿賀北產と佐渡・小泊產がある。土師器は北陸系の長甕と内面黒色の杯(9世紀後半~10世紀)がある。中世では、中国からの輸入磁器の青磁・白磁・染付、国産陶器の珠洲焼・瀬戸美濃焼・越前焼・瓦質土器、近世は肥前系陶磁器と越前焼が出土している。遺跡の時期を決める国産陶磁器の年代は、9世紀~19世紀までのものが出土しているが、中心となる時期は14世紀後半~15世紀代で、吉岡編年の珠洲V・VI期に当たる。土製品はSK12から中世の輪の羽口(未報告)が出土している。石製品は中世の石臼1点・敲石1点、中・近世の可能性がある砥石1点である。金属製品では鉄滓が2点出土している。木製品は井戸から出土した水溜めの結構と井戸側の枠木の部材5点、柱根1点である。

輸入陶磁器の編年は大宰府編年〔太宰府市教育委員会2000〕、珠洲焼は吉岡編年〔吉岡1994〕、瀬戸美濃焼は藤沢編年〔藤沢2008〕を使用した。

出土遺物は細片が多く、口縁部が残っているものも少なかったが、可能な限り図化した。個別の説明は、陶磁器・石製品・木製品の種別ごとに造構出土遺物、包含層出土遺物の順に行う。出土地点・層位等は巻末の遺物観察表を参照願いたい。

時期	分類	源種 産地	供耕具				調理具		野菜具			文庫具		不明	合計
			天日	輪	杯	皿	盤	片口縁	甕	壺	瓶	土瓶	水滴		
古代	土器	須恵器							3						3
		土師器			1				8					4	13
中世	磁器	青花	1												1
		青磁	7												7
		白磁	2												2
	陶器	瀬戸美濃	2			2				2			1		7
近世	土器	珠洲						14	20	1					35
		越前						1	2						3
	磁器	瓦器						1							1
		肥前系	9									1	1		11
	陶器	肥前系	1	5		1		2	2		1	1		3	16
		越前							1						1
合計			1	26	1	1	2	18	36	1	3	1	1	9	100

第2表 土器・陶磁器集計表

2 各説

A 陶磁器

SE9(1・2) 1は瀬戸美濃焼の瓶類の頸部~肩部片である。頸部に4条一単位の櫛描き沈線が入る。小片のため全体の器形が不明であるが瓶子の可能性もある。古瀬戸後期ころのものか。2は珠洲焼の片口縁部である。珠洲Ⅲ~Ⅳ期ころのものである。

SE19(3・4) 3は珠洲焼の甕の口縁部である。甕の破片は遺跡全体では20点出土しているが、口縁

部はこの1点のみである。珠洲IV期ころのものである。4は青磁の無文椀の口縁～体部片である。P16出土の破片と接合した。口縁端部は外反し玉縁状に肥厚する。被熱により器面が荒れる。14世紀後半ころのものである。

SK18 (5・6) 5は珠洲焼の片口鉢である。珠洲V期ころのものである。口唇部は一部面取りし、櫛描波状文が施される。鉢目は7条一単位の櫛描きである。断面の一部が摩耗していることから、砥石に転用か。6も珠洲焼の片口鉢である。珠洲V期ころのものである。鉢目は7条一単位の櫛描きで、摩耗している。

SK31 (7) 珠洲焼の片口鉢である。珠洲IV期ころのものである。

P4 (8) 珠洲焼の片口鉢である。珠洲III期ころのものである。鉢目は10条一単位の櫛描きである。

P5 (9) 青磁の蓮弁文椀である。13世紀後半～14世紀代のものである。

P15 (10) 珠洲焼の片口鉢である。珠洲V・VI期ころのものである。

P23 (11) 北越窯の可能性がある片口鉢である。珠洲II期・13世紀前半ころのものである。ほかの珠洲焼と比べ硬質である。

P24 (12) 12は無文の青磁椀である。14世紀後半ころのものである。口縁部は外反し玉縁状で、外面はロクロナデの凹凸が著しい。

SR1 (13) 13は試掘トレンチ23-1Tからの出土である。珠洲III期ころのものである。鉢目は10条一単位の櫛描きである。内面は摩耗している。

遺物包含層出土陶磁器 (14～20) 14はII層出土の15世紀代の白磁皿である。高台は削り出し露胎である。高台に4か所の抉りがあり、摩耗が著しい。見込みに3か所の目跡が残る。15は15世紀代の中国染付の可能性がある椀である。内外口縁部に界線が2条入る。16は唐津焼の天目椀の底部である。高台は露胎である。胎土は赤褐色で緻密である。16世紀末～17世紀初頭ころのものである。17は唐津焼の片口鉢の口縁部である。鉄軸が掛かる。17世紀前半ころのものである。18は瀬戸美濃焼の瓶子の体部である。2か所に4～5条の櫛描沈線文が施される。14世紀～15世紀初頭ころのものである。19は瓦質土器の片口鉢である。鉢目は櫛描きされ、摩耗が著しい。外面の剥落も著しい。15世紀後半～16世紀代のものである。20は珠洲焼の甕の体部であるが底部に近い破片である。外面はタタキ、内面は石の当て具痕が残る。珠洲V期ころのものである。

B 石 製 品

SE9 (21) 21はSE9の櫛組の中から出土した敲石である。敲打痕が残るのは1か所で使用による剝離が4か所確認できる。

SK29 (22) 22は石臼の上臼で挽目は摩耗が著しい。側面に挽き木を入れる横打ち込み式で、方形の打込孔がある。孔の大きさは一辺3cmである。

SK30 (23) 23は小型の砥石で、SK30中に掘られた中・近世以降のビットからの出土である。

C 木 製 品

SE22 (24) 24はSE22の水溜めに再利用された結桶である。底板は抜いてある。口径51.0cm・底径44.4cm・高さ39.0cmで26枚の側板を使用している。蓋は取上げ時にはほとんど腐食し残っていないが、上下2段の籠の痕跡が残る。24-2の側板1枚の大きさは長さ38.8cm、幅6.2cm、厚さ1.4cmで柾目取りである。腐食によって裏面には底板の痕跡は残っていない。側板は24枚が柾目取りで、板目

取りは2枚であった。上端部は残りが良いが下端部は腐食が進んでいるものが多い。結構が越後で水溜に利用されたのが15世紀後半ころとされるのでこれもそのころのものと考えられる。

SE34 (25 ~ 28) 25 ~ 28はSE34の底部付近から出土した井戸側の部材である。ゆがみ・ねじれのある丸木を半削し、両端に切り込みを入れ隅柱となる一辺5.5cmほどの角柱と組み合わせたと考えられる。隅柱は埋め戻しの際に再利用するため取上げられた可能性が高く残存していない。隅柱の残骸の可能性のある木片も出土しているが腐食が著しく、詳細は不明である。26の部材が長さ60.6cm、幅5.9cm、厚さ1.8cmであることから、井戸枠は約60cm四方の大きさである。

P33 (29) 29はP33から出土した柱根である。みかん割り若しくは4分割した材を使用している。四隅を面取りしている可能性もある。長さ(44.4)cm、幅23.0cm、厚さ(17.4)cmで腐食が著しい。橋脚の可能性がある。

第VI章 まとめ

1 磁組井戸について

北陸地方の2001年までの中世井戸については、北陸中世考古学研究会が集成している「北陸中世考古学研究会編2001」。北陸の傾向を確認しながら、越後はその後の成果を含め、本遺跡に特徴的な磁組井戸について考察する。

越前・若狭では13～14世紀は素掘りの井戸で、曲物使用が多く、14～15世紀も素掘りが大半で16世紀に入って石組井戸が出現し、一乗谷遺跡はすべてが石組となる。白山平泉寺旧境内遺跡では素掘り・石組半々となり、都市部は石組、農村は素掘りの見通しを持っている。

加賀では石組井戸は11世紀中葉～12世紀後半、13世紀からあるが、ほとんどが14世紀であり、切石を使用した井戸が白江梯川遺跡、永町ガマノマリ遺跡で数基認められる。

能登では、石組井戸が8世紀代の中美麻奈比古神社前遺跡で検出されているのが最も古く、14世紀前に半に寺家遺跡で検出され、14世紀後半から増加する。礫が付近に豊富にあるところでは石側を採用しているとしている。

越中では、12世紀後半～15世紀が木側、石組は14世紀に出現し、15世紀から井戸の主体となり18・19世紀まで続く。粘質土系台地は素掘り、冲積地は木・石組を採用しているとしている。

越後以西での石組井戸の出現時期、盛行の時期は多少の違いがあり地域色が出ているようである。

越後では、越中と傾向が似ており磁組井戸が採用されるのは14世紀代で、城館や有力集落に広がるのは15世紀代である。切石組は無く礫組のみで下越に多い特徴がある。これは、下越で館の発掘調査例が多く、上・中越で少ないと理由と考えられる。

第3表は越後の磁組井戸を集成したものである。遺跡数は13¹⁾、井戸数は38基、上越では4遺跡8基、中越は3遺跡5基、下越は6遺跡25基である。圧倒的に下越が多いが、胎内市江上館跡〔水澤1997〕、下町・坊城遺跡〔水澤1999・2005〕で19基を占めるのが特徴的である。全体的に集落より城館跡や寺院などで検出が多く、国人層などに広がった井戸の築造方法と考えられる。特に阿賀北衆と呼ばれた人々が削削した阿賀野川以北の地域に多い。糸魚川市の山岸遺跡〔春日ほか2012〕は鎌倉時代の越後守護名越氏関連の集落であるが、越後での磁組井戸の最も古い例となる可能性がある。本遺跡の井戸では、SE9の磁組井戸が珠洲III～IV期（13世紀後半～14世紀中葉）と越後での出現期に近い可能性がある。SE22の磁組井戸は陶磁器類の出土が無いが、越後では水溜めに結構が使用されるのは15世紀後半以降とされるので、SE22はほかの遺跡と同様15世紀後半以降の可能性が高い。

井戸の歴史的展開とその背景について鐘方正樹氏〔鐘方2003〕は、石組井戸は日本では7世紀前半ごろに出現する。その後、8世紀初頭までは飛鳥地方などで少量確認できるが、8世紀前半（奈良時代）～12世紀後半（平安時代末）までの間はほとんどなくなる。12世紀後半になって平安京で石組井戸が急速に普及し始めるのは、保元・平治の乱（1156・1159年）での社会の混乱、1177・1178年の平安京始まつ

1) 上越市至徳寺遺跡で中世後期の石組井戸が検出されているようだが、未報告のため含めていない。

越後の櫛組戸一覧

て以来の大火によって、井戸枠に転用する建築資材が失われ、木材の大量需要が発生したことで価格の高騰が考えられる。このため、近辺で容易に採取できる石を利用して石組井戸が作られるようになり、逆に、大火や戦乱を免れた地方では木製の井戸枠が使用され続けた。井戸枠の構造が木組みから石組へと変化していく現象は地方でも認められているが、その分布は有力者の居住域周辺に偏在する傾向がある。これは、京都を中心に盛行しつつあった石組井戸が外見的に都市型井戸様式として転化するような状況が生じ、それをおもに模倣することによって起きたとする。

室町幕府発足後、1341年に足利幕府の重臣である上杉憲頼が越後守護職となり、以後代々上杉氏が守護となる。上杉氏の越後の支配が進むにつれ、国人たちとの関係も強化され、しだいに越後国中に京都の文化も流入したと考えられる。越後の国人には「在京役」なる軍役が課され、守護上杉氏のもとで京都の警備に当ることになっていた〔山田 1987〕。在京中に見た都の石組井戸がそれぞれの館で再現され、所領の中でも「村殿」といわれた村落領主の間にも採用されたのではないだろうか。

2 陶磁器から見た遺跡の消長

本遺跡からは中国からの輸入陶磁器と国産の土器・陶磁器が出土している。これらの出土遺物から遺跡の消長を考察する。輸入・国産陶磁器の時期を第4表に示した。国産陶磁器は、わずかではあるが平安時代の須恵器・土師器が出土していることから、9世紀後半～10世紀初頭ころから周辺の人々の活動が知られる。その後、中世の12世紀末までは人の動きは無く、本遺跡が再び動きを見せるのは13世紀初頭である。出土遺物が増えるのは14世紀後半～15世紀代である。このころに小河村も最盛期を迎える。小河氏も「村殿」（村落領主）として本庄氏の支配下にあつたと考えられる。資料に小河氏の名が初めて見えるのは1481年のことである（第5表）。ただ、隸属的な支配関係ではなかった両者の関係が変化するのが、本庄長資が小河弾正左衛門長広の養子に入った時期（年不詳）と考えられる。小河氏を家臣とするため養子に出した長資は、天文8（1539）年に本家の本庄氏に対し謀反を起こし、同20（1551）年に耕雲寺において甥の本庄繁長に切腹させられる。その後小河氏は鍋川氏に帰属する。鍋川氏の居城があつた大場沢から東の石住へ至る道沿いに100m余にわたり十三塚があつた。これは切腹した小河長資以下、13人の死者を葬った場所と伝えるが現存しない〔大場ほか1986〕。小河村は一時期荒廃し、のちに本庄氏の家臣である石栗将監が入つたとされるが〔田中・大場1999〕、具体的な年次は不明である。小河村の重要性を考えると、そう間を置かないとも考えられる。石栗氏は旧小河氏の館があつたとされる場所には入らず、周間に集住したと見られる。慶長2（1597）年の「瀬波郡絵図」（第6図）には「小河村・鍋川・大國但馬分 中（地味） 本納 合百六十九石六斗七升五合 繩ノ高 三百四十六石八斗八升九合 家合十三間」と書かれ、數件描かれる星敷は石栗氏が中心と考えられる。小河氏の館があつたとされる地には、元和元（1615）年には旧朝日村の寺尾から金源寺が移築された。近世の17世紀後半～18世紀中葉の時期の遺物が欠けているが、調査区が狭小なことと関連すると考えている。その後は幕末～現代までの遺物が

種別	9世紀	10世紀	11世紀	12世紀	13世紀	14世紀	15世紀	16世紀	17世紀	18世紀
輸入陶磁器					■	■	■			
国産陶磁器	■	■			■	■	■	■		■

第4表 陶磁器から見た遺跡の消長

出土している。明治 23(1891) 年作成の土地校正図では、今回の調査範囲の北側は水田、南側は畠地となっているので、これ以前に居住域から耕作地に改変されたのであろう。

今回の調査範囲の遺構の分布状況から、遺跡は東西に延伸すると考えている。複数の櫛組井戸の存在は、有力な集落であったことを窺わせる。今回の調査区の東へ約 60m 行ったところに地元で「飛屋敷」(第 1 図)と通称されるところがあり、何らかの関係性も窺える。また、調査区西側の現在、三宮川内神社の社地周辺は小字名が「星敷添」となっており、中世以来の地名の名残と考えられる。

小河村の開発の歴史や小河館の有無については、村の中心地と考えられる現在の金源寺や周辺の発掘調査の成果によって、今後議論が深まるものと期待される。

西暦	元号	年	月	日	出来事
1481	文明	13	8	28	小河長広、耕雲寺へ 1000 斧寄進。
1531	享禄	4	8	20	小河長経、色部勝長・鶴川治長・本庄房長と血判請文を取り交わし、連携を誓う。
1535	天文	4	6		上条定重、也門・小河・本庄らの協力を要請する。
1539	天文	8	11	28	本庄房長(小河長貞元)死亡。小河長貞、兄本庄房長に謀反。本庄城へ入るか。
			12	4	本庄繁長(小河長貞元)誕生。
1541	天文	10	4	3	小河長経、色部勝長に書状を送る。
			8	5	小河長経、鶴川治長・色部勝長らと血判請文を取り交わし、連携を誓う。
1542	天文	11	1	29	小河長経・小河長貞連署書状
1546	天文	15	2	28	細尾景元、小河長貞へ書状を送る。
1551	天文	20	8	8	本庄繁長。小河長貞に腹を寄せ。小河氏滅亡。繁長本庄城主となる。
			11	3	本庄繁長、鶴川治元に小河一族の帰属を認める。
1568	永禄	11	6	20	本庄繁長。上野鷹虎に隸屬。鶴川治長知行実行状等に「大槻沢之内石栗屋敷空間」の文字がある。
			9	5	武田信玄・石川政監に書状を送る。
1587	天正	15			福葉名長衛賀守に石栗代の名が見える。上杉景勝の新発田重家攻めに際するもの。
					本庄家軍役帳に石栗利能、小川大夫の名が見える。本庄長の庄内進攻に際するもの。

第 5 表 小河氏・小河村関連年表



第 6 図 慶長 2 年「瀬波郡絵図(部分)」(白描)【村上市 2000】

要 約

- 1 狐屋敷遺跡は、新潟県村上市小川字狐屋敷 1010-1 ほかに所在する。
- 2 遺跡は、三面川左岸の自然堤防上に位置し、標高は約 12.0m で現況は水田・畑地である。
- 3 発掘調査は、一般国道 7 号小川交差点改良事業に伴い、2012 年 4 月～8 月まで 492m² を調査した。
- 4 室町時代（14 世紀後半～15 世紀）を中心とする集落を検出した。
- 5 遺構は、井戸 4・土坑 10・ピット 15 基等を検出した。調査区の南北で自然流路を検出したことから、集落の北限・南限に当ると考えられる。東西方向には集落が延伸している可能性が高い。調査区は幅 8m、長さ 80m と狭小だったため、集落全体の様相は不明であるが、井戸には縦組井戸が 2 基あり、有力者が居住する集落である可能性がある。
- 6 土器・陶磁器類の中心は中世で、中国の青磁・白磁・染付、国産の珠洲焼・瀬戸美濃焼・越前焼・瓦質土器が出土している。ほかに古代の須恵器・土師器と近世の肥前系陶磁器が少量出土している。石製品は磁石・石臼が出土している。木製品は井戸の水溜に使用された結桶と井戸側と考えられる部材が出土した。
- 7 遺跡は、室町時代に村落領主として本庄氏に従っていた小河氏に関係する集落と考えられる。

引用文献

- 青木 学 ^{著者} 2008 「第Ⅴ章 大館跡」『新潟県埋蔵文化財報告書 第180集 松落東遺跡・中曾根遺跡II・大館跡I』新潟県教育委員会（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 青木 学 ^{著者} 2009 「第Ⅲ章 大館跡」『新潟県埋蔵文化財報告書 第192集 大館跡II・東興星遺跡・高山東遺跡・窪田遺跡II』新潟県教育委員会（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 青木 学 ^{著者} 2010 「新潟県埋蔵文化財報告書 第218集 下新保高田遺跡」新潟県教育委員会（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 赤羽正春 1991 『朝日村文化財報告書 第7集 坊山遺跡発掘調査報告書』新潟県朝日村教育委員会
- 飯坂盛泰 ^{著者} 2005 『新潟県埋蔵文化財報告書 第139集 余川中道遺跡I』新潟県教育委員会（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 池田 亨 1992 『御船遺跡』新潟県大町教育委員会
- 大島秀俊 ^{著者} 2010 「第Ⅲ章 谷地遺跡」『新潟県埋蔵文化財報告書 第193集 谷地遺跡・八太郎遺跡・田屋道遺跡II・宮の越遺跡II』新潟県教育委員会（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 大場喜代司 ^{著者} 1986 「大場沢村」「新潟県の地名」日本歴史地名大系15 平凡社
- 尾崎高宏 2010 「余川中道遺跡II」『新潟県埋蔵文化財調査事業団年報平成21年度』（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 折原洋一 ^{著者} 2005 「新潟県埋蔵文化財報告書 第148集 西部遺跡I」新潟県教育委員会（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 春日真実 ^{著者} 2012 『新潟県埋蔵文化財報告書 第228集 山岸遺跡』新潟県教育委員会（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 加藤 学 ^{著者} 2003 『新潟県埋蔵文化財報告書 第128集 仲田遺跡』新潟県教育委員会（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 加藤 学 2008 「村上L.C.～朝日L.C.間 遺跡推定地15 試掘調査」『新潟県埋蔵文化財調査事業団年報平成19年度』（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 鍾方正樹 2003 『井戸の考古学』（株）同成社
- 小島幸雄 1984 『春日山城跡発掘調査概報Ⅱ』新潟県上越市教育委員会
- 真田敦・野水晃子 ^{著者} 2011 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第221集 古渡路遺跡本文編』新潟県教育委員会（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 鈴木郁夫 1987 『地形分類図』『土地分類基本調査 村上』新潟県農地部農村総合整備課
- 鈴木郁夫 1991 『地形分類図』『土地分類基本調査 塩野町』新潟県農地部農村総合整備課
- 菅沼 亘 ^{著者} 2005 「十日町市埋蔵文化財発掘調査報告書 第26集 伊達八幡館跡発掘調査報告書」新潟県十日町市教育委員会
- 田中真吾・大場喜代司 1999 「6章4節 岩船郡内の城館の分布」『村上市史 通史編1 原始・古代・中世』新潟県村上市
- 田辺早苗 1991 『神林村埋蔵文化財報告第3 長松遺跡発掘調査報告書』新潟県神林村教育委員会
- 太宰府市教育委員会編 2000 『太宰府市の文化財 第49集 太宰府糸坊跡XV—陶磁器分類編』福岡県太宰府市教育委員会
- 長谷川伸 1999 「6章3節 国人領の世界」『村上市史通史編1 原始・古代・中世』新潟県村上市
- 肥田野弘之 ^{著者} 1986 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第42集 高畠遺跡』新潟県教育委員会
- 藤沢良祐 2008 『中世瀬戸窯の研究』高志書院
- 北陸中世考古学研究会 2001 『中世北陸の井戸』北陸中世考古学研究会
- 水澤幸一 1997 『中条町埋蔵文化財調査報告書 第13集 江上館跡V』新潟県中条町教育委員会

- 水澤幸一 1999 『中条町埋蔵文化財調査報告書 第18集 下町・坊城遺跡Ⅳ～A地点の調査～』 新潟県中条町教育委員会
- 水澤幸一 2005 『中条町埋蔵文化財調査報告書 第33集 下町・坊城遺跡VI～D地点、坊城館の調査～』 新潟県中条町教育委員会
- 村上市 1993 『村上市史資料編1 古代中世編』 新潟県村上市
- 村上市 2000 『白描 潟波郡絵図』『村上市史別編 絵図・地図、年表』 新潟県村上市
- 山田邦明 1987 『第2章第2節3国人と守護』『新潟県史通史編2 中世』 新潟県
- 横山勝栄・田中真吾 2005 「フィールドノート 猿澤城の研究」『新潟考古』第16号 新潟県考古学会
- 吉岡康暢 1994 『中世須恵器の研究』 吉川弘文館

観察表

孤星敷遺跡遺物観察表

陶器の調整においては、ロクロ成形が基本となるのでロクロナホの表記は削除した。

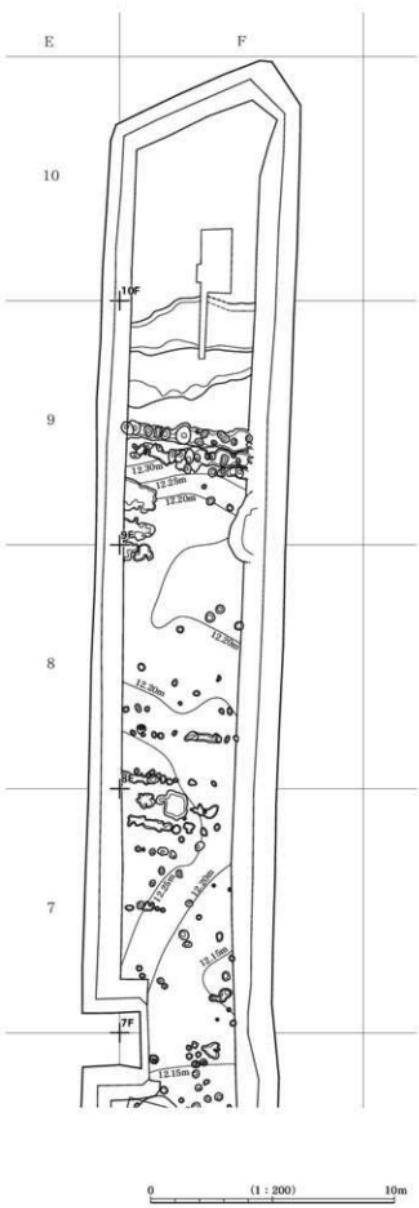
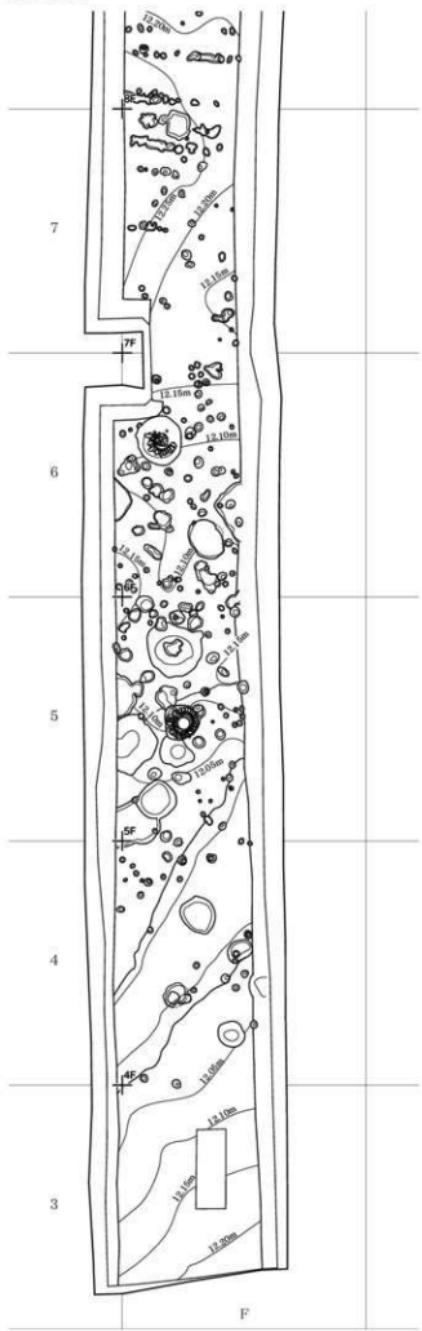
出土の含有物の表記は以下の略記号を用いた。海：海綿骨針、白：白色微粒子、黒：黒色微粒子

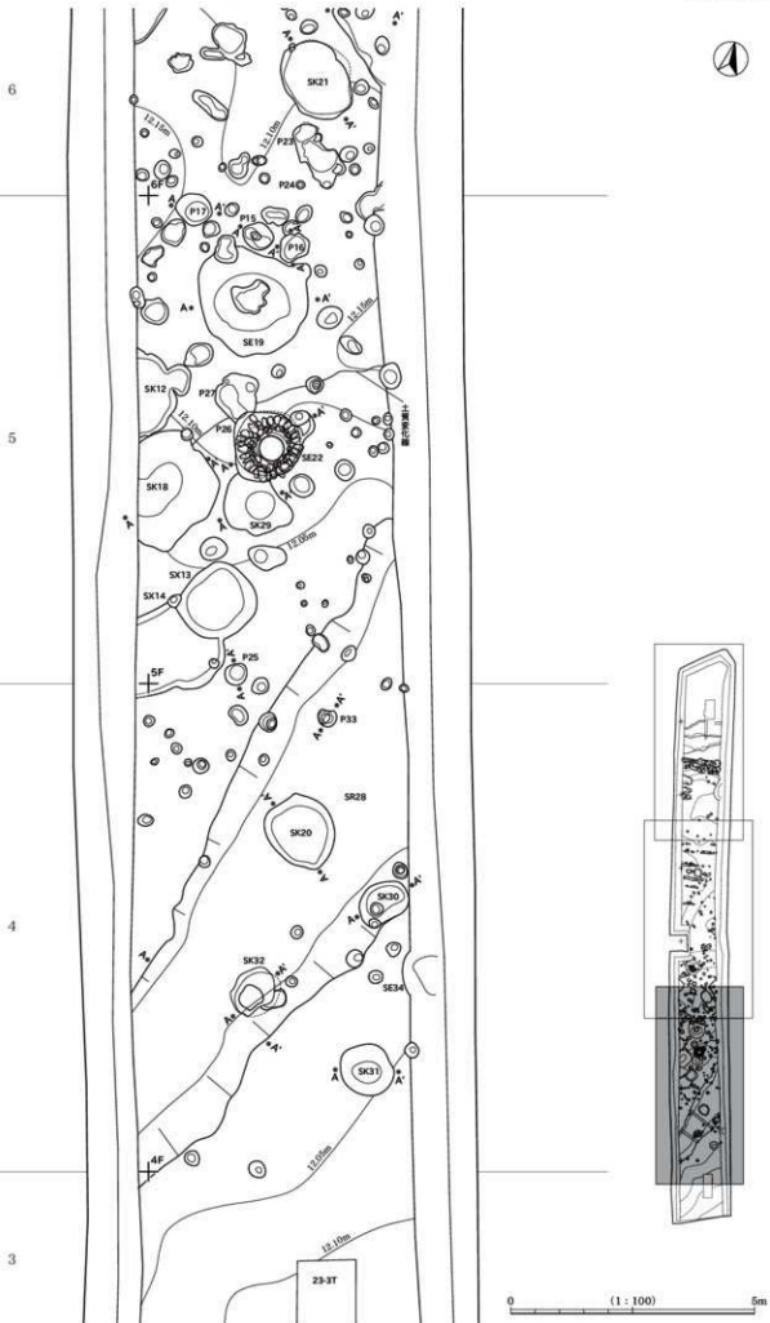
No.	グリッド	遺物名	班位	種類	形態	法 量 (cm)			内色調	外色調	質 感	期 代	構成	日 期	備 考	
						上幅	底径	高さ								
1	6F4	SK9	I	漆器 瓶	瓶	—	—	—	黒(白(2.5YR/2))	黒:オリーブ (2.5GY/2)	外:無地に4束・单 位の縦横斜め格子 内:無地に斜め格子	真好	古墳後 期から	表面に細かな貫入 がある。		
2	6F4	SK9	I	陶調鏡	月口鏡	—	—	—	黒(NG/6)	黒(NG/6)	真白し、白・黒わざ かに含む。	真好	陶調鏡Ⅰ 古墳後期			
3	5F5	SK19	I	陶調鏡	鏡	—	—	—	黒(NG/6)	黒(NG/6)	真白し、白・黒わざ かに含む。	真好	陶調鏡Ⅱ			
4	5F4- 10	SK16	2	青磁	灰文鏡	17.4	—	—	オリーブ (2.5GY/6/1)	オリーブ (2.5GY/6/1)	口縁部玉縁地に肥厚 する。	真好	14C後半 後半	白土・白石墨含む。	表面に貫入する。 黒熱により他品に混在。	
5	5F2	SK18	I	陶調鏡	月口鏡	32.4	—	—	黒(7.5YR/1)	黒(7.5YR/1)	口縁部面取り・縦横 波状、月口1単位 の横縞。	真好	0.5~2mm砂含む。	真好	陶調鏡Ⅲ 古墳後期。	
6	5F2	SK18	I	陶調鏡	月口鏡	—	—	—	黒(7.5YR/1)	黒(7.5YR/1)	内:月口1単位 の横縞。	真好	陶調鏡Ⅳ	内:薄丸		
7	4F12	SK31	I	陶調鏡	月口鏡	—	—	—	黒(NG/4)	黒(NG/4)	内:月口横縞	真好	陶調鏡Ⅴ			
8	7P7-8	P4	I	陶調鏡	月口鏡	—	—	—	黒(NG/5)	黒(NG/5)	内:月口1単位の横 縞。	真好	陶調鏡Ⅵ			
9	6F5	P5	I	青磁	漆端子	—	—	—	オリーブ (2.5Y/2/3)	オリーブ (2.5Y/2/3)	外:漆端子切り出し 内:漆端子。	真好	13C後半 ~14C	内部に貫入する。 内側に漆端子を差す。		
10	5P10	P15	I	陶調鏡	月口鏡	—	—	—	黒(SV5/1)	黒(SV5/1)	内:月口5束・单位の 横縞。	真好	陶調鏡Ⅶ ~ VIII			
11	6F6	P23	I	北越漆 か	片口鏡	—	—	—	黒(NG/5)	黒(NG/5)	内:月口の横縞は深 く無い。	真好	陶調鏡Ⅸ		質感的印象。	
12	6F6	P24	I	青磁	灰文鏡	14.0	—	—	オリーブ (2.5Y/3/3)	オリーブ (2.5Y/3/3)	口縁部玉縁地に黒 色の横縞。	真好	14C後半			
13	9-10F (23-37)	SK1	II-3	陶調鏡	月口鏡	—	—	—	黒(NG/6)	黒(NG/6)	内:月口10束横縞	真好	陶調鏡Ⅹ	内:薄丸		
14	3-4F (23-37)	II	白磁	皿	—	5.4	—	—	黒(白) (2.5YR/2)	黒(白) (2.5YR/2)	高内凹り出し、露點 有り、内側に10束に 亘る横縞は深く無い。	真好	15C	高内凹 率D型		
15	4F11	II-3	中国漆 付か	椀	—	—	—	—	黒(白) (5GY/1)	黒(白) (5GY/1)	内側に縫合部に2束 入り、表裏がかつた 透明感。	真好	15C			
16	3-4F (23-37)	II-2	青漆鏡	天目鏡	—	5.2	—	—	透明: 黒漆	透明: 黒漆	透明: 黑漆	真好	16C~ 17C前	ガマ模様付着		
17	9-10F (23-37)	II-2	青漆鏡	月口鏡	—	—	—	—	オリーブ (2.5Y/2/3)	オリーブ (2.5Y/2/3)	内:オリーブ (2.5Y/2/3)	真好	17C後半			
18	9P3	II-2	漆耳杯	瓶	—	—	—	—	黒(NG/6)	黒(NG/6)	外:オリーブ (2.5Y/2/3)	真好	14C~ 15C後半			
19	9P3	II-2	瓦質土 器	片口鏡	—	—	—	—	黒(NG/4)	黒(NG/4)	内: ホラチテ、漆端 子。	真好	15C後半	内: 薄丸 外: 重落しき		
20	5H24	H	陶調鏡	鏡	—	—	—	—	黒(NG/4)	黒(NG/4)	内: ホラチテ。タダ 年。	真好	陶調鏡Ⅺ			
21	5H9	SK9	漆刷毛	石製品	磁	長16.0	幅6.1	厚4.8	—	—	芯材: 鮎紅紫山岩	中抜	巻き 620g			
22	5H7	SK29	2	石製品	石臼 (土臼)	—	—	7.5	—	—	芯材: 鮎紅紫山岩	中抜	陶調鏡Ⅱ 巻き 950g			
23	4F13	P	1	石製品	磁	長6.6	幅2.4	厚1.3	—	—	長脚海帶折損。	石材: 鮎紅紫山岩	中・近抜	6枚以上に膨ら んだヒビから出 土。巻き 37.0kg, 4枚に掛かる。		
24	5H8	SK22	木製品	桶	51.0	44.4	30.0	—	—	26枚の板、縫2 段(板)	木取: 紙袋 板目 2段	2段(板目 2段)	15C後半	片口水翼の漆器		
24-2	5H8	SK22	木製品	桶	長28.8	幅 6.2	厚 1.4	—	—	—	木取: 紙袋	15C後半	No.20			
25	4F12- 13	SK34	木製品	桶	長58.8	幅 7.3	厚 3.4	—	—	内: 漆刷毛	木取: 半圓柱。	中抜	取上 No.1			
26	4F12- 13	SK34	木製品	桶	長60.6	幅 5.9	厚 1.8	—	—	内: 漆刷毛	木取: 半圓柱。	中抜	取上 No.2			
27	4F12- 13	SK34	木製品	桶	長59.8	幅 7.2	厚 2.9	—	—	内: 漆刷毛	木取: 半圓柱。	中抜	取上 No.4			
28	4F12- 13	SK34	木製品	桶	長54.5	幅 6.6	厚 3.6	—	—	内: 漆刷毛	木取: 半圓柱。	中抜	取上 No.5			
29	4F10	P33	木製品	桶	長 (44.2)	幅 23.0	厚 (17.4)	—	—	内: 漆刷毛	木取: みかげ置り、 芯材には4分割し て置かれている 可能性あり。	中抜	漆刷毛。			

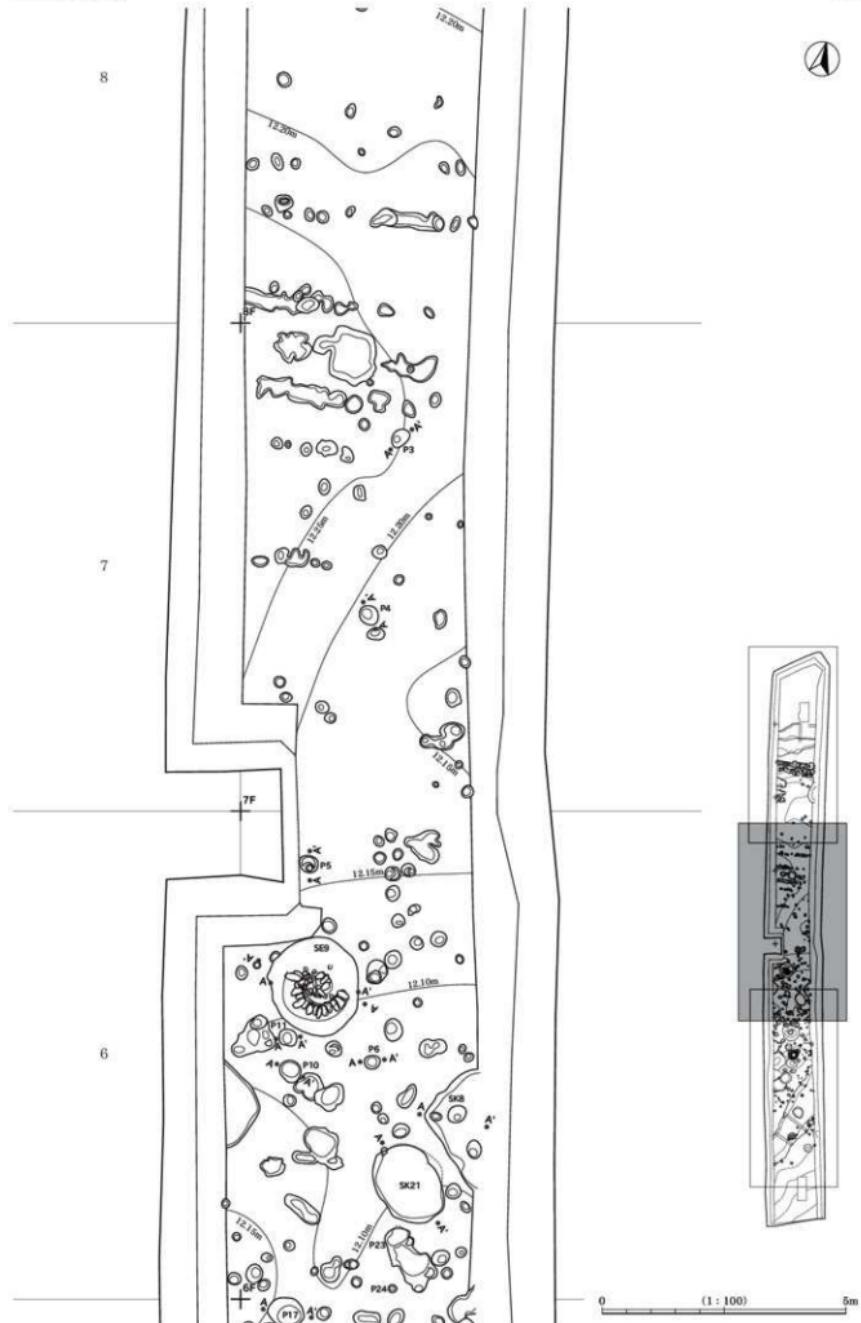
図 版

遺構全体図

版 1







E

F

10

11F

10F

9

8

SK1

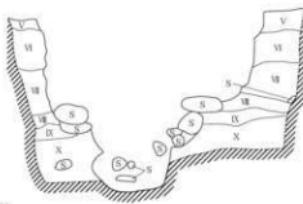
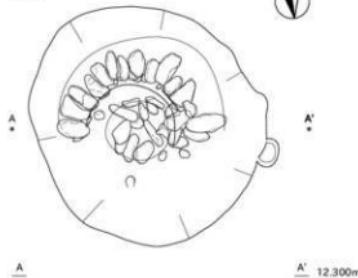
23-1T

SK1

SK2

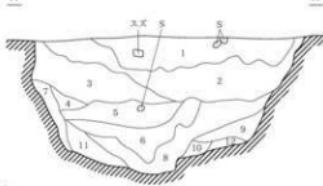
遺構個別図 (1)

SE9



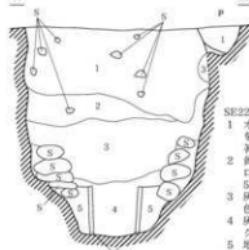
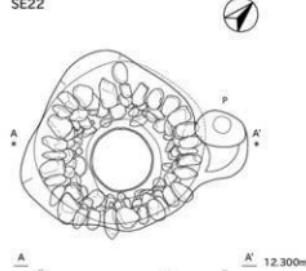
- V 黄褐色 (2.5Y5/4) シルト 粘性有り・しまり強い。
 VI 黄褐色 (2.5Y5/4) 砂 オリーブ褐色鉱砂含む。粘性無し・しまり強い。
 VII 黄褐色 (2.5Y5/4) シルト 粘性・しまり共に強い。
 VIII 黄褐色 (2.5Y3/3) 砂 粘性・しまり共に無し。粗砂・3~4cm大の塊多く含む。
 IX 黄褐色 (2.5Y5/6) 砂 粘性無し・しまり有り。
 X 明灰黃色 (2.5Y4/2) 砂 2~12cm大の鉱分が4割近く黒化した塊多く含む。

SE19



- SE19
- オリーブ褐色 (2.5Y4/3) シルト 粘性・しまり共に有り。黄褐色シルトをブロック状に少量含む。炭化物・10cm大の塊多く含む。珠粒焼出。
 - 黄褐色 (2.5Y5/4) シルト 粘性・しまり共に有り。砂少量含む。オリーブ褐色シルトをブロック状に少量含む。
 - オリーブ褐色 (2.5Y4/3) シルト 粘性・しまり共に有り。黄褐色シルトをブロック状に少量含む。炭化物・2~3cm大の塊少量含む。1層に類似。
 - 黄褐色 (2.5Y5/6) シルト 粘性・しまり共に有り。
 - オリーブ褐色 (2.5Y4/2) シルト 粘性・しまり共に有り。黄褐色シルトをブロック状に少量含む。炭化物少量含む。3cm大の塊少量含む。
 - オリーブ褐色 (2.5Y4/4) シルト 粘性・しまり共に有り。炭化物少量含む。
 - 黄褐色 (2.5Y5/6) シルト 粘性・しまり共に有り。砂少量含む。
 - 明灰黃色 (2.5Y4/2) 砂 粘性無し・しまり共に有り。
 - 暗オリーブ褐色 (2.5Y3/3) シルト 粘性・しまり共に有り。黄褐色多く含む。炭化物少量含む。
 - 灰褐色 (10Y4/2) シルト 粘性・しまり共に有り。炭化物・砂少量含む。黄褐色シルトをブロック状に含む。
 - 黄褐色 (2.5Y5/6) シルト 粘性は弱く・しまり有り。2cm大の炭化物・砂少量含む。
 - 黄褐色 (2.5Y5/6) シルト 粘性有り・しまり共に有り。
 - 黄褐色 (2.5Y5/6) 砂 粘性無し・しまり有り。

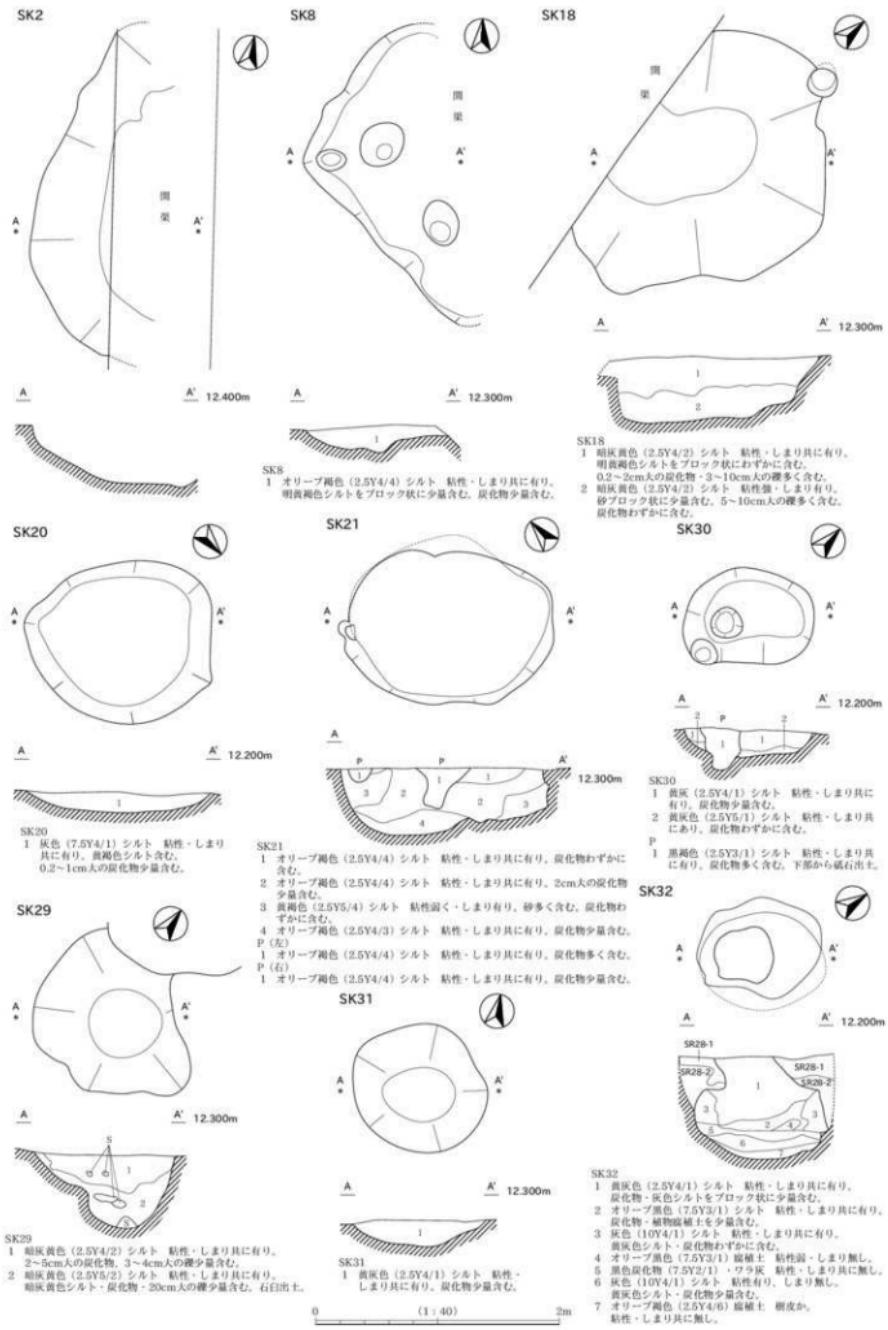
SE22



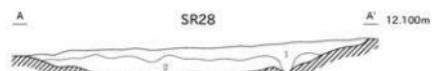
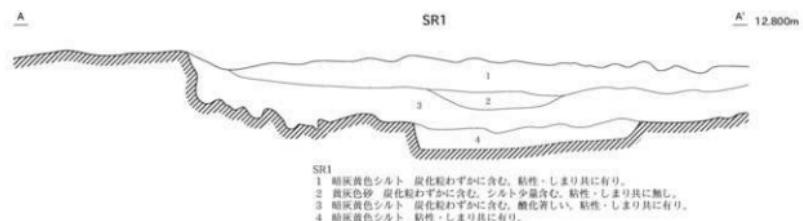
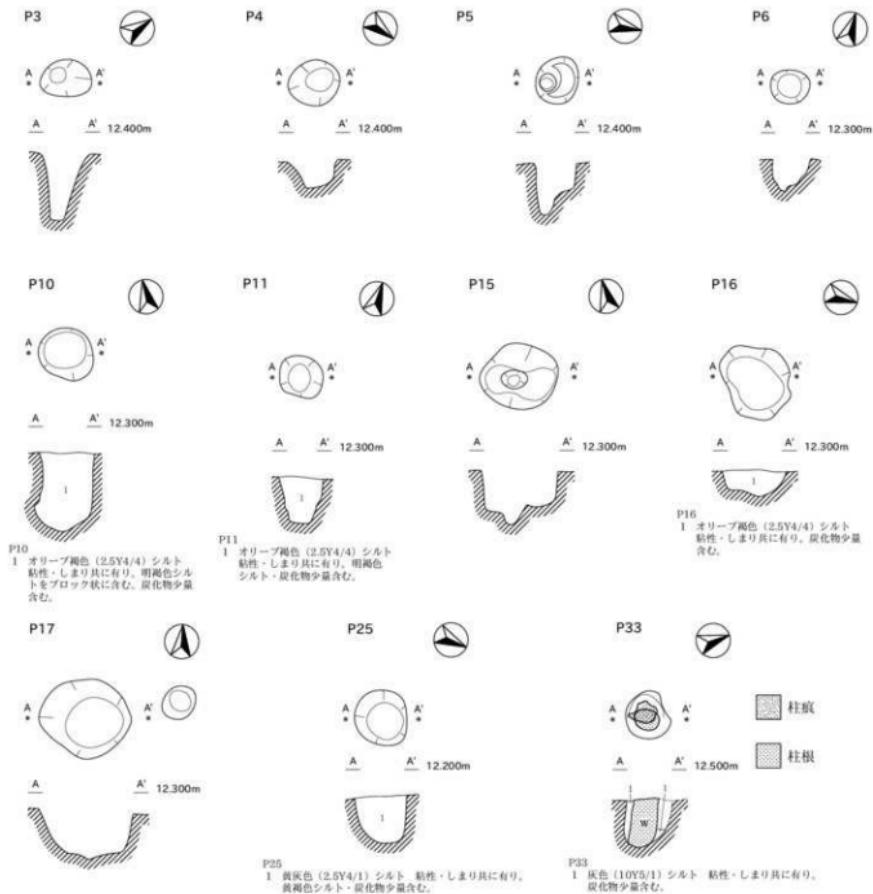
- SE22
- オリーブ褐色 (2.5Y4/3) シルト 粘性・しまり共に有り。黄褐色シルトをブロック状に含む。2cm大の炭化物・5~10cm大の塊多く含む。酸化著しい。
 - 黄褐色 (2.5Y5/1) シルト 粘性・しまり共に有り。黄褐色シルトをブロック状に含む。炭化物・2~3cm大の塊少量含む。腐食した板材 [10×10×1cm] を含む。
 - 黑色 (7.0Y5/1) シルト 粘性・しまり共に有り。1cm大の炭化物・黒褐色をブロック状に少量含む。
 - 灰褐色 (2.5Y6/2) シルト 粘性・しまり共に有り。1cm大の粘土ブロック・炭化物含む。3層との境に厚さ5mm程度の酸化鉄層を挟む。
 - 地山の砂岩層に灰色粘質シルトを含む。粘性・しまり共に弱い。
 - オリーブ褐色 (2.5Y4/3) シルト 粘性・しまり共に有り。炭化物・黄褐色シルトをブロック状に少量含む。

SE34





造構個別図 (3)



図版 8

陶磁器・石製品 (1)

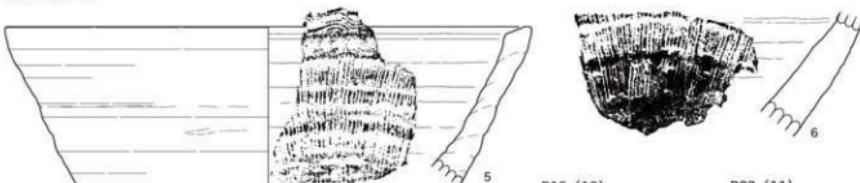
SE9 (1・2)



SE19 (3・4)



SK18 (5・6)



SK31 (7)



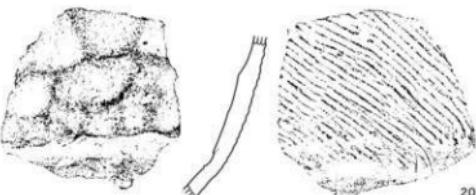
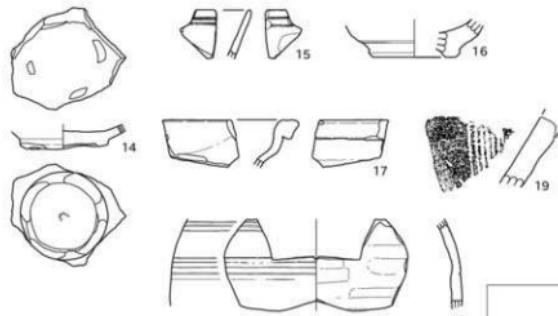
P5 (9)



P24 (12)



包含層出土陶磁器 (14~20)



0

(23)

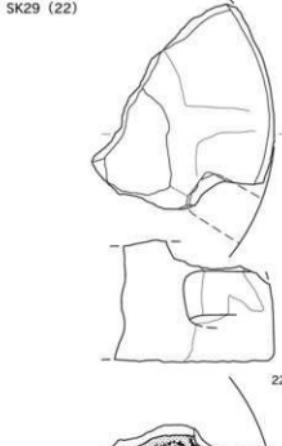
10cm (1:2)

0

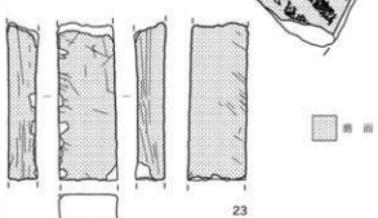
(その他)

15cm (1:3)

SK29 (22)

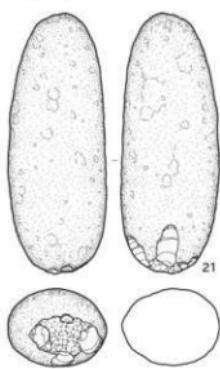


SK30 (23)



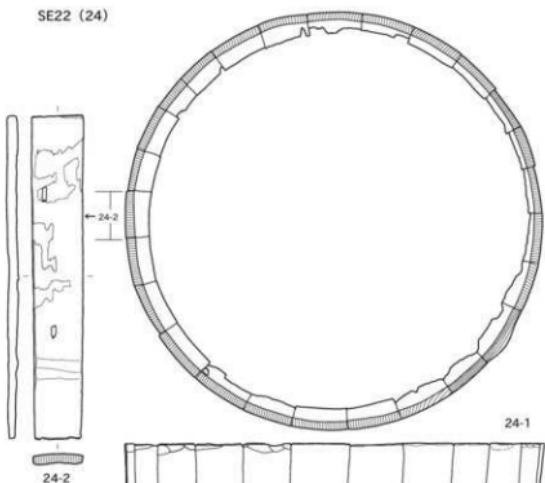
■ 黒 磁

SE9 (21)

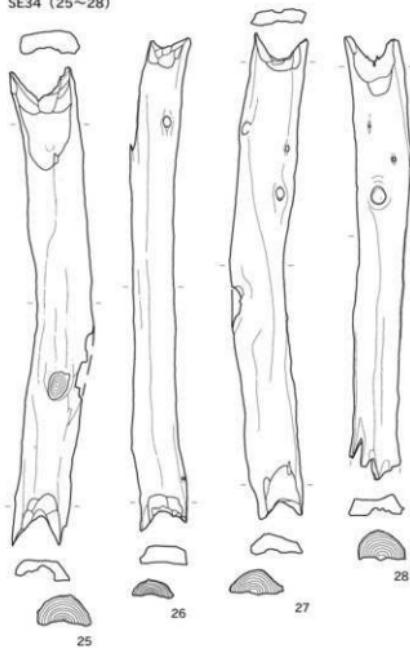


最打痕

SE22 (24)



SE34 (25~28)



25

26

27

28

0

(21)

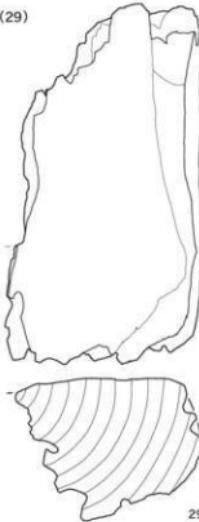
15cm (1:3)

0

(その他)

30cm (1:6)

P33 (29)



29



完掘（北から）



南側完掘（南から）



SE9 砧組出土状況（北東から）



SE19 完掘（南から）

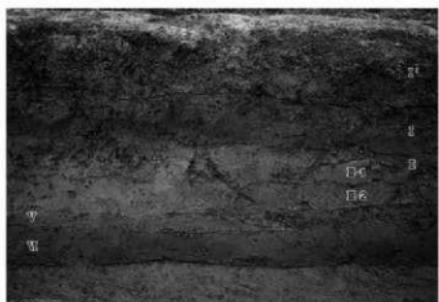


SE22 砧組・桶出土状況（西から）



SE34 井戸枠木出土状況（西から）

基本層序①～⑥、SE9



基本層序① 3F18 グリッド（西から）



基本層序② 4F17 グリッド（西から）



基本層序③ 5F19 グリッド（西から）



基本層序④ 7E22 グリッド（東から）



基本層序⑤ 8E24 グリッド（東から）



基本層序⑥ 9E23 グリッド（東から）



SE9 上部断面（南から）



SE9 碓組 出土状況（北から）



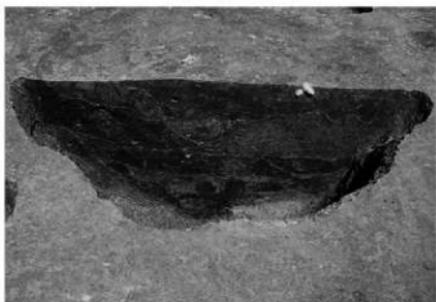
SE9 新面・東側（北から）



SE9 新面・西側（北から）



SE9 出土標



SE19 上部断面（南から）



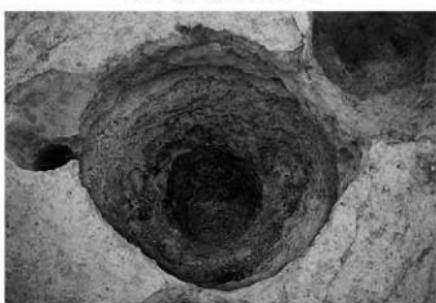
SE22 上部断面（南から）



SE22 稲組・水溜新面（南から）



SE22 完掘（東から）



SE22 捩形完掘（北西から）



SE34 新面（西から）



SK2 完掘（北から）



SK8 断面（南から）



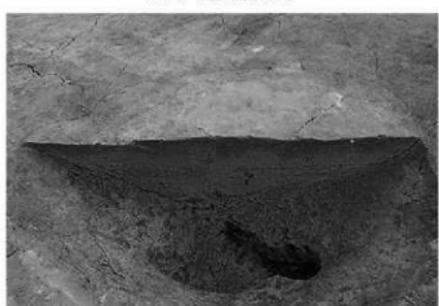
SK8 完掘（南西から）



SK18 断面（南東から）



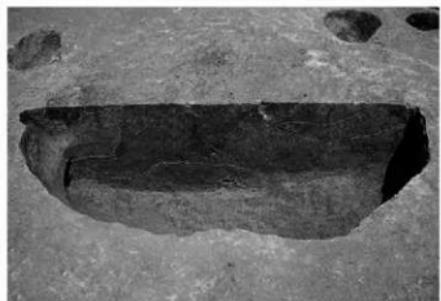
SK18 完掘（南東から）



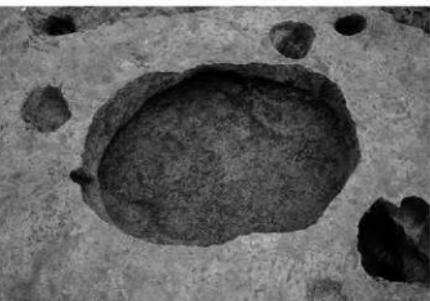
SK20 断面（東から）



SK20 完掘（東から）



SK21 断面（西から）



SK21 完掘（西から）



SK29 断面（南から）



SK29 完掘（南から）



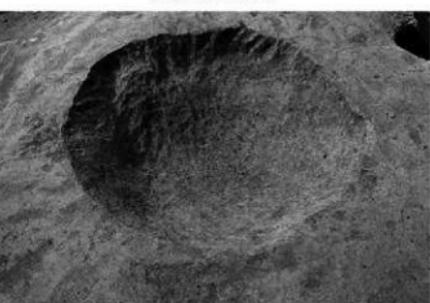
SK30 断面（南から）



SK30 完掘（南から）



SK31 断面（南から）



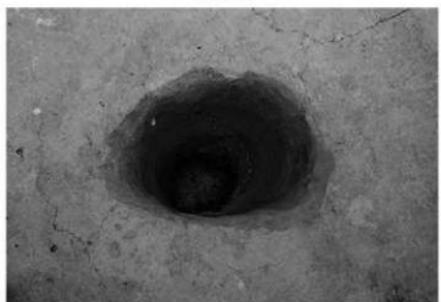
SK31 完掘（南から）



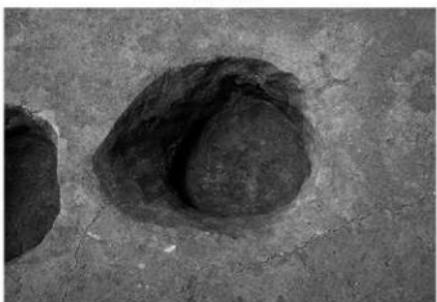
SK32 断面（北西から）



SK32 完掘（北西から）



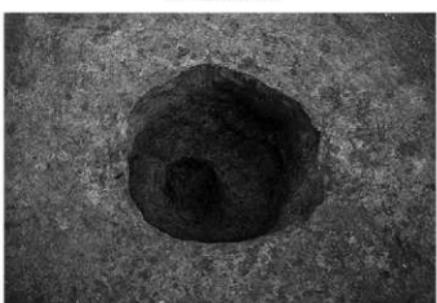
P3 完掘（東南から）



P4 完掘（東から）



P5 完掘（東から）



P6 完掘（南から）



P10 断面（南から）



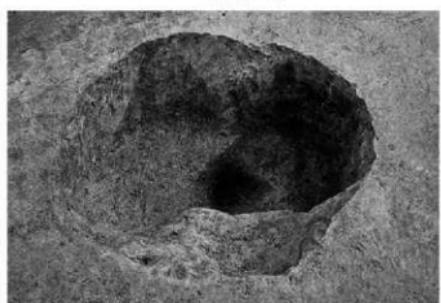
P10 完掘（南から）



P11 断面（南から）



P11 完掘（南から）



P15 完掘（北から）



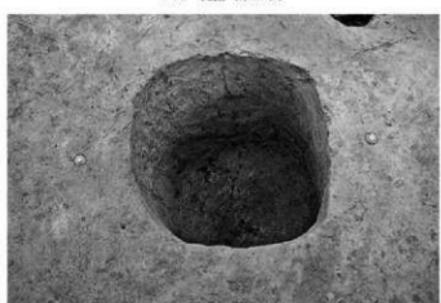
P16 断面（東から）



P16 完掘（東から）



P25 断面（東から）



P25 完掘（東から）



P33 検出状況（東から）



P33 断面（東南から）



P33 完掘（東南から）



SR1 断面 南側 (東から)



SR1 断面 中央 (東から)



SR1 断面 北側 (東から)



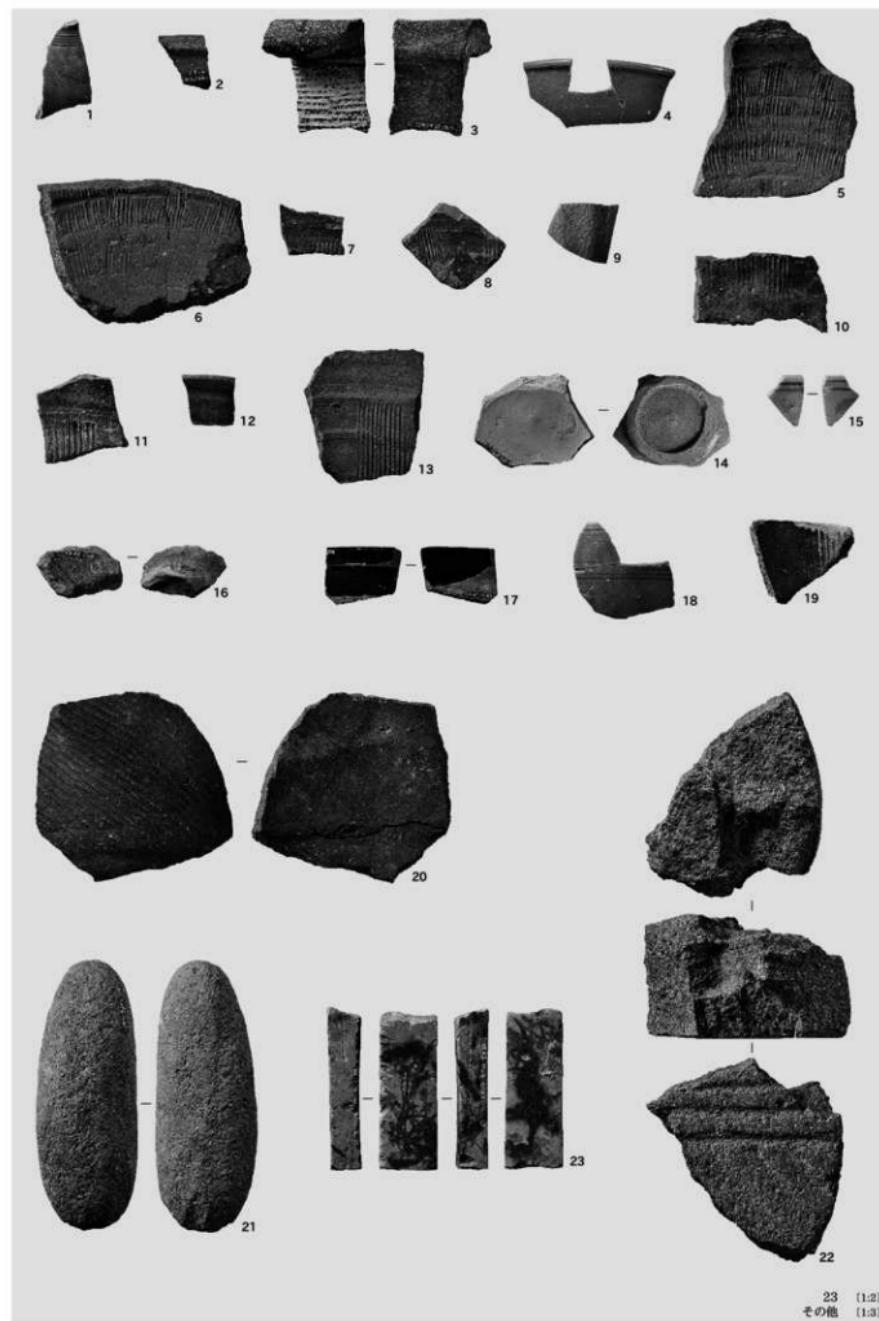
SR1 完掘 (南から)



SR28 断面 (南西から)



SR28 完掘 (北東から)





報告書抄録

ふりがな 書名	きつねやしきいせき 狐屋敷遺跡						
副書名	一般国道7号小川交差点改良事業関係発掘調査報告書						
巻次							
シリーズ名	新潟県埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	第242集						
編著者名	佐藤友子（新潟県埋蔵文化財調査事業団）						
編集機関	財團法人新潟県埋蔵文化財調査事業団						
所在地	〒956-0845 新潟県新潟市秋葉区金津93番地1 TEL 0250(25)3981						
発行年月日	2013(平成25)年3月29日						
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯 度 東經 度	調査期間	調査面積 m ²	調査原因	
狐屋敷遺跡 新潟県村上市小川字 狐屋敷 1010-1 ほか	15212	681 14分 51秒	38度 30分 12秒	139度 20120416～ 20120611、 20120613、 20120827～28	492	道路（一般国道 7号小川交差点） 改良事業	
所収遺跡名	種別	主な時期	主な遺構	主な遺物	特記事項		
狐屋敷遺跡	集落跡	室町時代（14世紀 後半～15世紀）	井戸4、土坑10、 ピット15、 自然流路2	青磁・白磁・中国染付・珠洲焼・ 瀬戸美濃焼・越前焼・瓦質土器・ 砥石・石臼・結晶・肥前系陶磁器	課組井戸2基		

新潟県埋蔵文化財調査報告書 第242集
一般国道7号小川交差点改良事業関係発掘調査報告書

狐屋敷遺跡

2013(平成25)年3月28日印刷
2013(平成25)年3月29日発行

編集・発行 新潟県教育委員会
〒950-8570 新潟市中央区新光町4番地1
電話 025(285)5511

財團法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団
〒956-0845 新潟市秋葉区金津93番地1
電話 0250(25)3981
FAX 0250(25)3986

印刷・製本 株式会社ハイングラフ
〒950-2022 新潟市西区小針1丁目11番8号
電話 025(233)0321